
panic of infect **【昼ヶ岳村編】**

伊勢ウドン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

panic of infect 【昼ヶ岳村編】

【Nコード】

N6365T

【作者名】

伊勢ウドン

【あらすじ】

学校の恒例行事で俺こと田神弘志 ヒロシ 達は山奥にある小さな村

【昼ヶ岳村】に訪れていた。

田舎ながらも、楽しい思い出を作った俺達はそのまま楽しく研修旅行を終え昼ヶ岳村を去ろうとしていた。

ところがその頃、旅館の中で俺達が帰る準備をしている時、外では、

異変が起きていた…

現在、視点を三人称から一人称へ変更しています。

それにより主人公のセリフ周りが多少変化したりしますが小説のストーリー上影響はありません。

何卒ご了承ください。

プロローグ（前書き）

この小説にはグロテスクな表現が含まれております。
グロが苦手、又は嫌悪感がある方はお戻りいただくことをお勧めし
ます。

プロローグ

プロローグ

夏の暑さもすっかり和らいだ9月の終わり

街の三崎第二中学に通う主人公の 俺こと田神弘志 ヒロシ 達は学校の恒例行事で山奥にある小さな村【昼ヶ岳村】に研修旅行に訪れていた。

街からバスで4時間以上かけ、到着した村はまさに田舎の代名詞ともいえる程のド田舎だった。

コンビニがないことはおろか、携帯の電波すら全く通じない。

田んぼと、川と、500人にも満たない村人

しかし、俺達の育った街にはないものがこの昼ヶ岳村には沢山あった。

最初、村にきた頃は何もなく、つまらない場所だと心の底から思っていたが、

きれいな自然や、人情あふれる村の人達に俺達は徐々に引き込まれていった。

泥まみれになりながら作物を収穫し、村の人とも仲良くなり、俺達の知らないことを昼ヶ岳村の人は優しく教えてくれた。

そして、時間が経ち、研修旅行の最終日となった日の朝、俺達は名残惜しい気持ちになりながらも、荷物を片付ける準備をしていた。

ちょうど、その頃…俺達の居る旅館の外では、異変が起きていた…

村の人間同士が顔見知りの人間を噛みつき、喰らい合い

殺し合いをしていたのだ…

恐怖で逃げ惑う女性や老人に容赦なく噛みつく村人だったモノ…
そして、噛まれた人間はまた別の人間に襲い掛かって噛みついた…
そんなことが村の中で何度も繰り返され、ついに俺達のいる旅館
にまで噛みつかれたモノが入り込んできた！

昨日まで、優しく接してくれた村人は俺達に襲い掛かり、そして
仲間だった友達や、厳しいながらも指導し相談にのってくれた先生
までもが、人を襲うモノに成り果てた。

昨日までの日常は消え去り、異常事態に放り込まれた俺達はいま
まで一緒にすごしてきた仲間が次々と人を襲うモノになくなっていく
なかで、どうやって身を、仲間を守るのか？

そして、殺戮の村に変わり果てた昼ヶ岳から仲間とともに無事脱
出することはできるのか！？

プロローグ（後書き）

伊勢ウドンです。

今回、これが初めての小説投稿になります。

初心者ですので、稚拙な文章になるとは思いますが、その点につきましては、

アドバイス、又はご指摘いただけると幸いです。

第一話 研修旅行その1

学校から出発したバスに揺られてそろそろ4時間が過ぎようとしていた。

バスの窓の外は一面、木と山と緑しかない。

山の中のグネグネしたヘアピンカーブをいくつも曲がり、バスが大きく傾くたびに顔を上に向け、俺は車酔いするのを防ごうとする。

右や左に不規則に揺れるバスの中では騒いでいる奴とどんよりした奴にきれいに分かれていた。

そして、その騒いでいるグループの中に場違いな程、暗い生徒がいる。

俺こと田神弘志 ヒロシ はさっきから向かい合った4人がけの座席で某モンスターをハンティングするゲームをやりながらバカみたくテンションの高い3人のクラスメイトに囲まれながら、ipodで好きな音楽を聴きながら制服のブレザーを頭からかぶり必死に自分に襲い掛かる車酔いと激しい戦いを繰り返していた。

「うっぶ…気持ちわりい」

俺は必死に今にもリバーズしそうな胃をなだめながら、頭にかぶっていたブレザーを下ろしてリュックサックに入れてあるミネラルウォーターのフタを開けながら独りでつぶやいた。

「お、なんだ、起きてたのか。」

pspから目を離さず忙しくその手をカチカチやっているクラスメイトの有坂雄介 ユースケ が声をかけてきた。

俺は耳に着けていたi podのイヤホンを外してユースケにぶつきらばうに答える。

「寝るも何も、こんなに揺れるバスの中で寝れるか。4時間だぞ？4時間もこんなに揺られながr…」

バスが再び左に大きく傾き俺はあわてて口を閉じる。

頑張れ俺の胃！

踏ん張れ俺の口！

諦めんな俺の精神！

バスの中の生徒は7割以上が立て続けに揺れるせいで完全に撃沈していた。

それもそのはず、今バスが走っている道は絶えずカーブが続き5回連続のヘアピンカーブも珍しくない様な山道だった。

それこそ、夜になれば某豆腐屋の名前が書かれた八チロクや黄色のRX7、もつと深いところまでいったらロードローラーまでもがドリフトで最速ラップをたたき出そうとしているような所だ。

そんな山道をすでに1時間半走り続けているので当然、車に弱い奴は真つ先に車酔いと戦いに敗れ口をへの字につぐんでいる。

俺も対車酔い防衛戦に敗れた数多くの仲間の内の一人だ。

それなのに、4人がけの座席に座っている俺以外の3人は無邪気(?)にpspでモンスターをハンティングしまくり、次の討伐対象であるモンスターに使う武器防具の打ち合わせをしている。

…なんでこいつら、ほとんど皆が車酔いでダウンしているのにこんなに元気なんだ？

バカだからか？バカだからなのか！？
そう俺は心の中で葛藤した後、ハンティングの打ち合わせをして
いるユースケに聞いてみた。

「なあ、目的地まであとどの位で到着するんだ？」

すると、ユースケはp s pの画面から一瞬目を離して時計を見て
答えた。

「そうだな、今、午後1時だからあと2時間ちよつとだな」

……なん……だと……？

その答えは俺を絶望させた。

というより死刑宣告以外の何者でもない。

……俺終了のお知らせ。

こんな、バスにあと2時間以上も乗らなきゃいけないのかよ！？
つか、もう無理、吐きそう、吐くかも！？

てか、なんでこいつら残り時間聞いてそんなに嬉しそうなんだ！？

そんなにゲームやりたいなら、旅館に着いてからでもいいだろ！

ちつくしょう、こんなことなら、適当に嘘ついて休めばよかった！

ああああああああああああアツーーーーーーー！！

……と、バスの真ん中で心の中の思いを叫びたいのを抑え俺は強
制的に自ら眠りについた。

第一話 研修旅行その1（後書き）

バスのなかで切羽詰まった状況と思春期が合わさると本当に大変な
ことになります。

（作者体験談）

第二話 研修旅行その2

「あー死ぬかと思った……」

バスから降りた俺は、まだエンジンの動いている乗ってきた大型バスにもたれかかった。

まだ、頭がぐわんぐわん回っているような気がする。

今の俺の顔は誰かが見たらきつと「わー真っ青、どーしたの、バスというよりまるでジェットコースターに乗せられたあとの表情みたい」と言っに違いないだろう。

いいさ、そう言いたきゃ好きなだけ言えばいいさ。

俺は頑張ったんだ。

俺自身の名誉を守るために何とか吐かないように6時間もあの地獄の中で耐えてきたんだ。

天国のじっちゃん見てるか、俺は、ヒロシは地獄の戦場を戦い抜いて勝利したよ！！

俺が脳内で戦地から帰還した英雄になりきりを褒め称えていた時「いやー、あとちよつとのところ、拡散弾がきれちゃってさー」

俺を含め周りのほとんどの生徒がバスの揺れのせいでうわの空の中、俺と一緒に座っていた3人

ユースケ、森川智 サトシ 、田井中正憲 正憲 、が周りのどんよりした空気 お構いなしに喋りまくっている。

結局、その後、俺は眠ることはできたのだが、眠った後も周りのコイツらの盛り上がりは収まらず、何度も起こされ、(この三人の無駄に高かったテンションのせいで)そして、俺はまたバスでの乗り物酔いと戦う羽目になった。

俺がバスにもたれかかっている間に俺と同じような症状に陥っている自分のクラスメイトや他のクラスの生徒たちが、続々とバスから降り駐車場に集まってきた。

さつきバスで通ってきた山道がよほど応えたのだろう、駐車場に集まる生徒はほとんどがフラフラの状態で、傍からその光景を見たらまんまゾンビの集団の様に見えたことだろう。

「はい！それじゃあ、1組と2組、それから3組と4組は旅館の玄関前にすぐに移動してください！！」バスから出てきたゾンビの集団（対乗り物酔い攻防戦での敗者）に赤いめがねを掛けた若い女の先生がクラスごとに並ぶように指示を出す。

彼女は今年から俺達のクラス担任に選ばれた大学を卒業したばかりの 問宮京子 京子 先生だ。
年齢は24歳の新米教師だが、面倒見がよく厳しいながら優しい一面もあり、ほとんどの生徒から好かれている。

「京子先生、今日もかわいらしい」
そう、目を輝かせてぼそっとつぶやいたのはユースケだった。

「ユースケ、相手は俺たちよりも、10歳以上年上なんだぞ。せめて、もうちょっと年齢の範囲をだな……」

俺とサトシが若干引いたような感じでユースケに言う。

「なんだ、お前ら。年上がなんだって言うんだ。いいじゃん別に、かわいいもんはかわいいんだし」

ユースケが危ない目の輝きを保ちつつ2人に言った。

「いや、まあそれは、それでいいんだけどさ。」
サトシが続ける。

……ホントのことを言うべきだろうか……

いや、ユースケ傷つくだろうし……

「あの先生、結婚してるぞ」

あ、サトシが言っちゃった。

てか、もう少しサトシも配慮してあげるべきじゃないかな？
それを聞いたユースケは一瞬凍りつきサトシに聞き返した。

「嘘だ！！そんなまさか……」

ふと、ユースケは京子先生の手の薬指を見た。

そこには銀色に光る指輪がはめられていた。

それを見た瞬間、ユースケはその場に崩れ去った

「そんな、まさか、嘘だ……」

ユースケはひとり言のようにつぶやいた。

「おい、お前いかげんにしろよ……」

俺とサトシが呆れた様に言う。

「だって、まだ24歳なのに……早すぎるだろ!?!」

「「知るか!!」」

俺とサトシが同時に言い放った瞬間……

「こら、あなたたち、そんなところでぼさっとしていないで早く並びなさい！みんなもう並び始めてるわよ。」

噂の京子先生が近寄ってきた。

「あ、すいません。ちょっとユースケのバカが……」

サトシがユースケを早く移動することを促すように足で小突きながら言つと、

「どうしたの、ユースケ君。具合でも悪いなら医務室に行く?」

京子先生が座り込んでいるユースケに近寄って声を掛けた。

「いえいえいえ、俺は大丈夫っす！すいません、今行きます！！」
そういうと、シャキッと立ち上がりクラスごとに並んでいる列に
向かって走り出した。

……おいおいさっきまでの落ち込みぶりはどうした？

呆れながら、クラスごとに並んでいる列に走っていくユースケを
見ながら俺とサトシは列に向かって歩き出した。

その時、

「ほら、あんた達！さつさと並びなさい！なにしてんのよ、皆を
待たせているんだから急ぎなさいよ！」

声の方に目を向けると2人の女子が立っていた。

黒髪ロングとポニーテールの女子で、さっきのキツイ言い方のポ
ニーテールの女子はクラス委員長の島田諏訪子 諏訪子 黒
髪ロングで諏訪子とは真逆の物腰の柔らかい女子は清水冴 冴 だ。
二人とも俺達と同じ3組の生徒だ。

「早く行かないと皆に迷惑がかかっちゃうよ？」

黒髪ロングの冴がポニーテールの諏訪子とは真逆の優しい物腰で
ヒロシとサトシに声を掛けた。

「ああ、悪かった、すぐ行くよ。」

俺が謝ると、俺達は急ぎ足で列に向かった。

「…それでは、先生方からの忠告は以上です。 それでは、続い
てこの旅館の支配人の山田さんからのご挨拶です。 姿勢を正して！
礼！！」

先生たちの長々とした忠告や説明を終え、今度は旅館の支配人の

挨拶だ。

生徒が礼をすると、支配人の山田さんが話を始めた。

「えー、三崎第二中学校の生徒、教員の皆様、当旅館にようこそおいでくださいました。当旅館のメインは何といいましても、この昼ヶ岳村の美しい自然とおいしい作物でして、当旅館には県外からもたくさんのお客様が、最近マスクミにも取り上げられているグリーンツーリズムを体験する為に……」

5分ほどして山田さんの挨拶が終わりいよいよ各自教員によって公・平 に割り当てられた部屋に着いてジャージに着替える。

この後すぐに、旅館から100メートルほど離れた場所にある旅館が所有している広大な畑で作物を収穫するのだ。

「休む暇すらないぜ」

お前ら散々、バスの中でゲームをしまくっていただろ!?

ユースケとサトシに俺は心から冷ややかな突っこみを入れた。

そうしている間に皆の前に麦わら帽子をかぶった70歳位のおじいさんが出てきてクラスメート達に

挨拶と作物の解説を始めた。

そのおじいさんの名前は 花岡松治さん 花岡さん と自己紹介した。

花岡さんはボランティアの一環として、ヒロシ達の宿泊している旅館で農業部門の案内係として働いているそうだ。

「それでは、みなさん、軍手をはめてこの畝を掘ってみてください。」

一通り挨拶と解説が終わった後、作物の実演収穫を行うことになった。

俺達が畝を軍手をはめた手とシャベルで掘ると土からサツマイモがでてきた。

生まれてから街で暮らし続けてきた俺達にとって、作物を実際に収穫することは初めてで新鮮な体験だった。

畝を掘り起こすたびに、土の中から顔を出す作物を見て俺達は夢中で作物を収穫した。

「思ったより楽しいな！」

誰かがそうつぶやいた。

俺達も同じ気持ちだ。

俺達が一息ついた頃には日はすっかり落ち、東のそらは藍色に染まっていた。

こうして、実習を終えた俺達は旅館に戻り、楽しい夕食が始まった。

食堂の窓のカーテンの隙間から外を見ると村はすっかり闇に包まれ、点々と存在する家から明かりがともっているのが見えた。

それは、俺達の暮らしていた街では見ることでできないどこか暖かく、少し幻想的な風景だった。

現在 20時 ジャスト

第三話 潜入

「おい、そっちの方はどうだ？」

「大丈夫だ、なんとか行けそうだ……くっ……そお！」

「あと、ちょっとだ！そこで諦めるんじゃないよええよ！！！」

「ちくしょう……分ってる……そんなこと分かってるよお！！！」

正憲が3階の窓から外へ半ば体を伸ばし、サトシは正憲が窓の外へ落ちないようにサポートする。

窓の外に備え付けてあるアルミの柵を握っている正憲の手は恐怖と緊張で汗ばんでいた。

緊張感が部屋の中に張りつめている最中、俺は正憲とサトシが繰り広げる危険な光景を固睡ではなく、部屋に置いてあったお茶を飲みながら横目で見守っていた。

「くっそお、やはり2部屋の壁は越えられなかったか……っ！！」
正憲が悔しそくに、手にpspを持ったまま、布団の上に倒れこんだ。

「なにやってんの、お前ら？」
俺はお茶を啜りながら虫を見るような目で正憲とサトシの方を見た。

「決まってるんだろ！？せつかく、こうしてメンバーが揃っているんだ。それなら……やることは分かるだろ？」

「今日の日誌書いた？」

俺は敢えて答えを外して返事す。

「違うわ！皆でパーティー組んでラオ○ヤンロン討伐しに行くんだよ！！そのはずだったのに、pspの赤外線が2部屋向このユースケと小林のpspに届かねえんだよ……」

……こいつはしばらくゲームから隔離する必要があるな。

とりあえず、布団の上に崩れた正憲には追い討ちの言葉をかけておく。

「1日5分でいいから頭からゲームのことを離せ」

俺そう言い俺は黙々と日誌を書き進めた。

自分で言うのもなんだが俺は別に暗いタイプの人間ではない。むしろ学校では明るいタイプの方だと思う。

俺が昼ヶ岳に到着してから暗く不機嫌に見えるのは、疲れと乗り物酔い、俺のついていけないあの三人の無駄に高すぎるテンションのせいだろう。

うん。

きつとそうだ。

そつに違いない。

そう思いたい……

「おーい、風呂に行こうぜ」

そう言っって寝間着用のジャージとタオルを持って部屋に入ってきたのはユースケと小林と、隣のクラスの牧田だった。

「なんだ、もう風呂に入れる時間なのか？」
サトシが尋ねた。

「8時から9時までの間に入っとけって、文ちゃんが言ってた」

文ちゃんとは俺達の副教員で体育の 山口 文太 (ぶんた) 先生だ。

筋肉ムキムキで校則違反した生徒には体罰で制裁を加えるが校則違反を犯したり、本人の目の前で

「文ちゃん」とさえ言わなければ体罰を加える事はない、文ちゃん曰くハートフルな先生らしい。

「それなら、さつさと風呂に入って、ユースケの部屋でパーティー組んで一狩りやるか。」

俺も含め、部屋にいた全員が着替えの入った袋を持って大浴場へとむかった。

「あーいい湯だな」

俺がため息をついて湯船につかる。

かすかな硫黄の香が俺の嗅覚を刺激する。

今日の嫌なこと(バスでの車酔いと、コイツらから被ったあんなことやこんなこと。全部書いたら夏休みの作文程度の原稿用紙枚数はすぐに書けるだろう)が一気に忘れられる。

「お前はじじいか」

小林やサトシが笑いながら言う。

うん、そうだね。

じじいだね俺、お前らが普段から気苦労ばっかりかけるからね。我ながら年齢の割に老けている気がするよ。

「さてと、疲れもとれたことだし、ユースケの部屋で俺もパーティーに参加するかな」

俺は疲れと嫌なことを全てお湯に（水に）流してさっぱりすると今までの気持ちから心を入れ替えた。

「お、ヒロシもやる気だな」

「当たり前だ。せつかく来たんだから思い出の1つや2つ増やしてもいいじゃないか」

俺は今までダウンしていた分を取り戻すためにもこれから寝るまでの間全力で研修旅行をエンジョイすることに決めた。

風呂から上がり着替えた俺達はゲーム機を持参してユースケの部屋に向かった。

全員が熱中してゲームをやっていたらすでに消灯時間前になっていた。

「それじゃあ、今日はこれで上がるかな」

俺は時計を見つつ同じ部屋のメンバーに声を掛ける。

メンバーはまだやりたりないという表情をしていたが消灯時間も迫っていたので（本当は消灯時間云々よりも文ちゃんの体罰をおそれて）部屋に戻ることにした。

部屋に戻ってから同じ部屋のメンバーとでゲームの対戦は続いた。

「やばいやばい、やられた。誰か俺に心臓マッサージをしてくれ」

「よし、俺にまかせろ！」

「あーるぴーじー!!」

俺をはじめとした4人は消灯時間が過ぎた後も盛り上がり続けていた。

「グレネード!」

「あ、こいつやりやがったな」

「よーし、後はトドメ・・・」

ーーーーガチャツーーーー

『おい、消灯時間は過ぎてるぞー早く寝ろー』

そういつて部屋に入ってきたのはあの体罰教師の文ちゃんだった。文ちゃんが入ってきた瞬間全員即座に布団に入りこみわざとらしい寝息を立てて寝たふりをした。

俺達の寝た(ふり)事を確認するとボタンとドアの閉まる音がして文ちゃんの出た行ったことを確認する。

俺達は文ちゃんが完全に部屋から去ったことを再度確認すると布団から這い出て、p s pの電源をいれてまた楽しい時間をエンジョイする。

「くらえ!4連装ミサイr・・・」

ーーーーガチャツーーーー

文ちゃんがもう一度ドアを開けヒロシ達の部屋を確認する。そしてまた静かに出て行った。

「あつぶねー、文ちゃんのやつ、フェイントかけてきやがった」

「しかも絶妙なタイミングだったな」

「ビビるわあアレ」

そして俺達は今度はテンションを抑制して静かにトークをはじめたのだった。

どれくらい時間が経ったのだろう。

部屋の時計で時間を確認すると23時10分だった。

22時が消灯時間でそのあと文ちゃんによって精神的な面でゲームを中断せざるを得なくなり、ずっと趣味やらなんやらの話をしてきた。

隣の部屋は静かだったが寝てる人はそれほど多くはいないだろう。だって、全然眠くないんだもん。

仕方ないね。

話の最中にふとサトシが思い出したようにつぶやいた。

「しまった。飲み物買ってくるのを忘れてたわ」

そう言つと他の皆も飲み物を買ったことに気付いた。

「誰かこの中にこっそり1階の自販機まで買いに行ってくれる者はいないかね…」

俺を含め案の定全員が黙った。

「お前、こつこつというのは一番すばしっこい奴が行くべきだと思うんだけどな」

そういつて正憲が言つと全員が俺の方を見た。

「…俺に危険を冒して買いに行けと？」

「いや、俺は足の速くて周囲の状況が素早く確認出来るヒロシ君

がこういつのには適任だとおもっただけだなあ」

気持ち悪さ全開でサトシがヒロシの長所をこころざとばかりにヨイシヨする。

やめて、よらないで気持ち悪い。

「そうだな、こういつのはヒロシが得意そつだよな。昔からかくれんぼは得意だったよな」

「それは関係ないだろ!？」

俺がコンマ3秒で反論する。

こいつ、人をおだてるときだけは抜かりねえな。

「じゃあいいよ、俺が行くよ」

サトシが名乗りを上げた。

「そんなら俺も!」

正憲もサトシに続く。

「じゃ、俺も」

同じ部屋の山田も続いた。

3人が俺を見る。

おい、これって俺が名乗りを上げた瞬間にどーぞどーぞって〇チヨウクラブみたいにいっつもりだろ。その手には乗らないからな。

いや、乗ってやらないからな。

絶対に!!!

俺がそう思った瞬間正憲が言い出した。

「なんだよ、ノリが悪いな。いいよ俺が行くから、みんな何が飲みたいんだ?」

あれ？

なんで？

俺に無理やり行かせると思ったのに、なにこの展開？

正憲が皆のほしいものリストと代金を受け取っている。

え、なに、なんか俺悪いことしたみたいじゃん。

俺がそう思っている間に正憲がドアの方へ歩き出した。

その時、俺も声を掛ける。

「おい、待てよ」

正憲が振り向く。

「やっぱり、俺も……」

そう、俺が言った瞬間皆が一斉に言った。

俺は言葉を口にしてしまった瞬間に後悔した。

「……どーぞ、どーぞ」「」

「チクシヨウ、完全にハメられた。ってかあの時点で気付けよ、俺」

終わったことは思い出しても仕方がないことだが俺の腹の虫が収まらない。

心の中でブツクサ言いながら308号室のドアの隙間からこっそりと外の様子を伺い、俺は部屋を出た。

俺は背を低くしながら壁伝いに進んであらゆる障害物を最大限に利用して自販機の置いてある1階まで降りる。

俺の手にはお金と買い物リストの他に丸みの帯びた四角に棒状のものが付いた黒い機械をもっていた。それはサバイバル好きなサト

シがヒロシに手渡したトランシーバーだった。
サトシ達が何がしたいのかはわかる。

……あいつら確実に俺で遊んでやがる。

「それならそれで俺も楽しんでやろうじゃんか」
俺は独り言を言いトランシーバーのイヤホンマイクを耳に装着した。

このときつと俺は真夜中の薄眠さにに思春期が合わさりテンションが変な方向に向いていた。

そう思いたい……

「H Q (3 0 8 号室) 、 H Q (3 0 8 号室) (こちらヒロシ、異常なし」

「こちらH Q (3 0 8 号室) 了解、嚴重に警戒せよ」
サトシが無線で応答してきた。

無線の感度は良いようでサトシの声の他にユースケや山田が俺のネタで爆笑している声もはっきりと聞こえている。

よし、帰ったら一発とつちめてやろう。

そう、心の中で決意した俺は無線を切り、自販機の前に来ると千円札を自販機に押し込み買い物リストを見る。

「えーと、ペプシnextとマウンテンデューが4本ずつと後は…
…マテ茶あ！？こんなモン売ってねえだろ！緑茶にしとけ」

俺があらかじめ持ってきておいたビニール袋に買ったものを詰め込んでいたその時……

「誰だ!？」

自販機の後ろから声が聞こえあわてて身を隠す。
その声から連想するに声の主は文ちゃんだった。

文ちゃんは手にm16ではなく使い込まれた竹刀を装備しこちらにゆっくり向かってくる。

「HQ(308号室)、HQ(308号室)、敵(文ちゃん)に見つかった！応援を送れ！」

「増援 ネガティブ は出せない。現有戦力で敵(文ちゃん)を排除せよ」

ムリです。

俺が死にます。

「出来るか！！逆にこっちが排除(体罰的な意味で)されるわ！そうしているうちに俺と文ちゃんとの距離が縮まっていく。ヤバい、マジヤバい。」

その時正憲からサトシに無線が変わり落ち着いた口調でヒロシに話しかける。

「落ち着くんだヒロシ。身の回りに、何か使えるものはないか？」

俺は某ゲームに登場するバイな副司令官のように話しかけるサトシに思いつきり突っ込みを入れたい衝動に駆られたが、俺と文ちゃんとの距離はすでに10メートルを切っていた。

俺は低い姿勢で周りを見渡すと、どこかの陰で小島監督が見てくれているのだろう、大きめのダンボールが1つ近くに置いてあった。俺は迷わずダンボールに入り中で体育座りして敵(文ちゃん)がこのままマザーベース(教員待機部屋)に帰投してくれるのを心から願った。

ダンボールのすぐ横を文ちゃんが通り過ぎていくのを肌で感じる。ダンボールの存在に気づき文ちゃんがダンボールを見下ろしているのがいちいち見なくても分かる。

ダンボールの取っ手から文ちゃんの足がゆっくり動いたのが見え、
……ああ俺、このままちよつと蹴られてダンボール開けられるんだ
……と思った瞬間、思いっきりダンボールを蹴飛ばされた。

俺はアイテムと一緒にダンボールから転がり出て、文ちゃんに発
見されミッションは失敗に終わった。

その後、俺達部屋のメンバーが全員廊下で正座させられ1時間フ
ルに怒られたのは言うまでもなかった。

第三話 潜入（後書き）

ペプシネックスって大人の飲み物って感じですよね。
作者も早く大人になりたいです。（精神的な面で）

ご意見、ご感想お待ちしております。

誤字脱字などがありましたら指摘していただけると幸いです。

第四話 最終日前日

研修旅行二日目

旅館の玄関前に集合した1組から4組までの合計140人余りが各クラスごとにかたまって並んでいる。

その生徒達の一番先頭には文ちゃんや京子先生が生徒に今日の体験学習での注意事項を拡声器を使って説明していた。

生徒達の何人かはうつむいていて、その中には足元がおぼつかない者が何人かいる。

おそらく、俺達と同様に夜更かしをしていたのだろう、先生方の注意はうわの空だ。

俺達も体が不規則に前後左右に動き、先生が話し終わった後も頭を上下に揺らしてうなずいていた。

……つまりは寝てました。

この日の起床時間はとても早かった。

それというのも、研修旅行二日目の予定は魚捕りで、花岡さんが前日に仕掛けておいた罠にかかっている川魚を回収するというものだった。

俺達は昨日（厳密に言えばこの日の深夜）文ちゃんの説教をくらった後もなかなか寝付けずに部屋のメンバーと話をしたりしていた。結局俺達が寝ることが出来たのは起床時間の3時間ほどまえだった。

おまけにこの日の体験授業は魚捕りということもあり、起床時間は5時前だ。

俺が前にいる生徒に何度か頭をぶつけた後、また文ちゃんが先頭

に立ち拡声器片手に話し始めた。

「よし、皆準備はいいか!? これから、4キロ先にあるポイントまで歩くから、途中で険しい所もあるから友達同士互いに助け合っつてしつかりついてこいよ!」

4キロと険しい道のりという言葉が出た時、生徒達のほとんどは「えー」という声を上げていたがそんなことはお構いなしに文ちゃんが出発の号令をかける。

ポイントまでの道のりは最初の3キロは緩やかな上り下りの道のりだったが、それを過ぎると今度は人の頭より大きな石がそこらへんに転がっていて、50センチはある段差がいくつもあつた。

そんな道を合計2時間弱かけて、川の上流のポイントについた頃には俺は肩で息をしながら着ていたジャージは泥だらけで見るも無残な姿になつていた。俺は小さな手鏡で顔を見ながらティッシュで汚れを拭いていた。

「これくらいでバテるなんて本当にあんた達、だらしないわね」その声の方向にヒロシは最後の力を振り絞つて顔を向けた。

そこには、冴や諏訪子の他に 神奈川 このは(コノハ)と 増田 早苗さなえが余裕そうな顔つきで地面にダウンしている俺を見下ろしていた。

「あんな道のりを歩いてきてバテないやつがいるかよ」俺がそのままの体勢で答える。

「いるじゃないの、ここに」

諏訪子とコノハはいかにもドヤ顔といった表情で涼しげに答えた。
そんな二人に俺達はもはやしゃべる気力さえ残っていないかった。
……こいつらバケモンだ……

「そついえば、今気が付いたんだけど、いつも一緒にいる仲良しのサトシはどうしたの？」

ふと、思い出したように諏訪子が俺に尋ねる。

「サトシ……、そついえばさっきから見ないなあいつ
俺もサトシがないことに気づいて辺りを見回す。」

「俺も今朝、部屋で見てから会ってないな
正憲も今思い出したように俺と同じように周辺を探す。」

「まさかあいつ、途中で迷子になっているんじゃないの？」
小林とユースケが笑いながらヒロシの後ろに立っていた。

「うお！お前らいつからそこに！？」
俺が驚きながらいつの間にか背後にいた二人言った。

「「ずっと前からお前の後ろにいたよ！」「」

「ああ、じゃあさっき俺の後ろでハアハア興奮しているやつがい
ると思っただらあ
前らだったのか、すまんすまん」

俺が冗談で言うとお小林とユースケはカチンときたらしい。
俺に二人がかりでホールドし、絞め技をかける。

「お前も、さっき、息切らして、ダウン、してた、じゃねえか！
」！

小林が俺の背後で両腕を使いヒロシの首を絞める。

「ちょ……おまつ……ゴメン、悪かったって……ギブギブ……」
俺が自分の首を絞めているサトシの腕を叩きながら謝る。

ようやく、俺と小林とユースケによるガチムチパンツ（ジャージ）レスリング（三人ともガチムチではないが）が終わるとその光景を楽しそうに眺めながら見ていた冴が思い出したように言う。

「サトシ君だけど、朝皆が旅館の前に集まる前に先生と旅館から借りた車に乗ってどこかに出かけていたよ」

「先生と車で？ いったいどこへ？」

「さあ、知らない。でも、今日のサトシ君なんか暗かったわ」

「あいつ、どこか身体の具合でも悪いんじゃないの？」

正憲が言う。

「でも、あいつが風邪で学校休んだことなんて今まで無かったと思っぞ」

小林が正憲に反論する。

「だよな。昨日も文ちゃんに説教くらった後も皆で楽しくゲームしてたし」

「確かに、今のこのメンバーはコノハと小林以外全員小学校に入る前からサトシと一緒にだったけど、あいつが病気したなんてことは無かったな」

俺やユースケも小林と同じ考えだ。

元々、コノハと小林以外、俺達は家が近所ということもあり、親同士も仲が良かったのでサトシとは物心が付いた頃から一緒に遊ん

でいた。

俺達もやはりサトシが病気になったなんて記憶は無かった。

「だけど朝起きた時はなんか沈んだ感じだったな。俺が話しかけても適当に返事して、後は洗面所でゆっくり顔洗ってた」

ユースケもサトシが今朝暗かったことを覚えていた。

「アイツがあそこまで暗いなんて滅多にないよな」

俺も普段のサトシの行動から、今日のサトシの様子は変だと思っていた。

サトシがそこまで暗くなったのは俺やサトシ達が小4の頃以来だった。

サトシが小4の頃に親が離婚して二週間くらい誰とも話さず、ずっとふさぎこんでいた時期があった。

落ち込んでいたサトシだったが、俺や冴、ユースケや諏訪子が積極的に話しかけ、外に連れ出したりした甲斐もあり、離婚からしばらく経つと元のうるさいくらい明るいサトシにもどったのだ。

因みに俺は昔、何度か自分の母親にサトシの親の離婚について尋ねた事があったが俺が今より子供だったせいか（自分でも変な気分だが）頑としてその理由について教えてくれなかった。

「じゃあやつぱり、体調でも崩したんだな。昨日も遅くまで起きていたし」

俺もサトシが心配になってきた。

結局、俺達はサトシは体調を崩して先生に連れられて病院に行つたという答えで納得した。

そんなやり取りをしている最中、文ちゃんが再び拡声器を使い、今度はイキイキとした感じで話始めた。

「いいか皆、これから、昨日の内に花岡さんが仕掛けておいてくれた罠にかかっている魚を捕りにいくぞー！これが今日の昼飯になるんだから魚が捕れないやつは、昼飯が抜きになるぞー！」

そういつて花岡さんに拡声器を交代して、花岡さんから皆に注意やアドバイスを伝えると皆一斉にあらかじめ持つてきておいたサンダルに履き替え朝の冷たい川の水の中に入って入った。

「いいか、押すなよ、お前ら絶対に俺を押すなよ！」

正憲が罠の仕掛けてあるポイントの岩の上にしがみつきながら言った。

「分かったから、早く罠を取れよ」

俺達が返事をする。

「いいか、絶対だぞ。もし、押したりなんかしたらマジで沈めるからな！！」

正憲が念を押す。

「心配しなくてもそんな事しないからさっさと罠を回収しろって」

「マジで押したら承知しねえからな！」

「だから、分かったつってんだろ！」

俺もだんだんイライラしてきた。

「ホントに約束だぞ。こんな冷たい水の中に落ちたりしたらお兄

さん風邪ひいちゃうよ!？」

俺達がイライラしながら足をダンダン踏み鳴らしている時、後ろで諏訪子が「バカは風邪なんかひかない」と言ったのは決して空耳ではないだろう。

「じゃあ、今からコレ取るけど絶対にお兄さんを押さないでね！お兄さんとの約束だよ！ いいね！

絶対に押した」……」

「……いいから、お前は黙ってとれや!!!」「」

正憲が最後まで言い終わる前に、俺達の何かが切れ正憲は蹴飛ばされて川に落ちた。

「……お前ら……、あれほど押すなよって言ったよな、俺」
水草まみれになった正憲が川から上がってきた。長い水草や前髪が絡まった様子はまんま貞子だ。

「いや、お前あれは完全に、押せの合図だろ」

「だからってリアルに押す奴がいるかあ!!!」

そういうと貞子（正憲）は顔に付いた水草を払いながら追いかけてきた。

途中で清々しいくらいの勢いでズッコケた俺に正憲がつつかかてきた。

小林達はというと無情にも他のメンバーと共に全力で逃げていた。

「てめえ覚悟しやがれ!!!」

正憲はそう言って俺の腰にタックルをかます。

「あん？元はといえばお前がさっさとブーツを回収しなかったから

こうなったんだろ！」
そう言った俺は水気を含んだ正憲のジャージをひっぱる。

二人のアツイガチムチジャージレスリング第二ラウンドが幕を開けた！！

実況と解説は小林と諏訪子がお送りするぜ！

小林と諏訪子が俺達からやや離れた岩場から携帯をムービーに設定して実況解説をしている。

正憲が俺の上着をつかみ、俺も負けじと正憲のズボンを引っ張り上げる。

「解説の諏訪子さん、両者の互いに譲らない戦いになってきましたね。緊迫した状況になってまいりました。果たしてどっちが勝つのか」

二人が楽しそうに実況してやがる。
後で覚えとけよ。

俺は心の中でそう思いながら正憲のバランスを崩そうとする。
そして正憲が反撃体制に出た――

「いいか、お前らもう二度とあんなことすんなよ！分かったか！
？分かったら返事は！？」

「すみませんでした」

俺と正憲は石の上に正座させられて文ちゃんのお叱りを受けていた。

あの後、二人ともパンツ一丁になるまでリアルガチムチパンツレスリングを戦っていたら文ちゃんが飛んできて、二人にケツ丸太（

ケツバツトの丸太？er 丸太はその辺に転がっていたものを使用）
をくらわせてそのままの姿で説教を受けていた。

屈辱の説教が終わり、二人がメンバーの所へ戻ると皆は石で即席のかまどを作り上げ、捕った魚に塩を塗り込んで串刺しにする作業を行っている最中だった。

「よお……お前ら……戻って……いたのか……つぶぶつ……ちよつと魚に……くくつ……塩を……塗っ……」

そこまで言う小林は耐え切れなくなったのか腹を抱えて大笑いしだした。

転げまわって笑っている小林をシメようかと俺と正憲は思ったがその考えはすぐに捨てた。

俺達のすぐ後ろでは、文ちゃんがさつき俺と小林にくらわしたケツ丸太で使用したものより更に太い丸太を見つけてなにやら嬉嬉と素振りしていた。

小林をシめるのは旅館に帰ってから考えることにして二人は昼食の準備に取り掛かった。

炭と魚が焼ける香が鼻をつき、魚の焼き目が付いた面とは逆の面を同じような要領で逆にする。正憲は魚を焼いている間中ずっと鼻歌を歌いながらこんがり焼きあがった魚を見て一言叫んだ。

「上手に焼けましたー！ー！！」

俺達は焼きあがった魚をほおばりつつ、話をしているとおにぎりを持った花岡さんがグループにはいつてきた。花岡さんも混じり俺達も花岡さんのおにぎりを貰い話を弾ませた。

しばらくして昼食を終えると生徒達は後片付けを終え、今朝来た道を引き返した。

俺達が旅館に戻るとサトシがロビーで先生と話をしていた。

サトシが先生と話を終わると俺がサトシのもとにより体の具合を尋ねる。

「おい、サトシお前大丈夫なのか？」

俺が心配しながらサトシに尋ねた。

「えっ？何が？」

サトシが困惑したように俺に聞き返す。

「何がって、お前昼飯の時先生と一緒に車で病院にでも行ってたんじゃないの？」

すると、サトシは

「え……、ああ、アレね。あれは……その、ばあちゃんちに行ってたんだよ。俺のばあちゃんこの村から少し離れた街に住んでいて、俺もほら、滅多に会える機会がなくてさ。だから、事前に先生に頼んではあちゃんの家まで車で送っててもらったんだよ」と説明した。

「ああ、何だ。ばあちゃんどこに行ってたのか」

「そう、今年ではあちゃん80歳になるし、今は一人暮らしだから、ちよつと挨拶がてら様子見してきたんだ」

サトシが答えた。

その時俺はサトシが心なしかソワソワしているように見えた。

「それなら、まあいいや。俺達マジでお前の事心配してたんだからな」

俺が言っているとサトシは「マジで？」という感じで、ヒロシ達を少し笑いながら見た。

サトシは自分の事を仲間が心配していたことが嬉しかったようだった。

「それじゃあ、これからどうする？今日は後日誌書いたら夕飯まで自由時間だ。また、皆で一狩りいかないか。」

俺の意見に訝や諏訪子達も賛成してユースケの部屋に集まることにした。

俺達は夕食の時間直前まで遊びに熱中して気がついた頃には陽が傾いていた。

研修旅行最終日前日の夕食は村でとれた野菜や魚、それに村の猟師の人達が狩ってくれた鹿やイノシシの肉をふんだんに使ったバーベキューだった。

夕食には村の人も食べ物を持って集まり、屋外での盛大な夕食会になった。

俺達は村の人とコミュニケーションをとり、ユースケは村の猟師の人達と猟についての話で盛り上がった。

村の人達との交流も深まり夕食の最後にはビンゴ大会で大いに盛り上がった後、この日の予定は全て終わった。

夕食の後俺達は部屋に戻ると珍しくゲームには手を付けずに部屋の窓際でペプシやマウンテンデュー片手に、さっきとは違って変わったように静まり返った昼ヶ岳を眺めていた。

村からは人の声がしなくなり、聞こえてくるのは虫の鳴き声だけ

だ。

消灯時間はこの時すでに過ぎていたのだが誰も布団には入ろうとはしない。

俺達は明日でこの昼ヶ岳村を去る。

最初に昼ヶ岳に来たときはあまりにも田舎過ぎてソッコーで帰りがたくなつたが、今はその時とは逆の気持ちだ。

昼ヶ岳の人達は初めてここに来た自分達にいろいろ知らないことを教えてくれたし優しく接してくれた。

俺達は昼ヶ岳の魅力に完全に引き込まれていた。

街の方が生活に必要なものは全て揃っていて、電車やバスなどの交通機関やショッピングモールやコンビニと言ったものがあって不便なことは何もない。

だが、この村には街にはないものが沢山あることを知った。

「いよいよ明日で最後か。思ったよりも楽しかったよな」

「明日で帰ると思うと寂しくなるな」

「最初来たときは、どうなるかと思っただけど、本当にいい所だったよ。この昼ヶ岳は」

「俺、老後はここに家を建てて住もうと思うんだ」

俺がそう言ったとき皆が笑い出した。

「なんだよ、なんか俺おかしいこと言ったかよ」

俺が反論すると

「いや、だってお前、まだ中2で老後の生活とか早過ぎるってそうサトシに言われた。」

「お前、自分の将来設定を考えることは大事だぞ」

「はい、ヒロシおじさんのお説教タイムが始まりました！。皆姿

勢を正して聞くように！」

正憲が茶化して言うのと部屋の中は笑いに包まれた。

俺はまともに話すことはやめて、ペプシを飲みながら外の風景を見た。

窓から見える山道にちょうど二台の車が走っているのが見えた。

一台はワゴン車でもう一台はトラックだった。

村からはその二台が走っている音以外は虫の鳴き声以外は聞こえなかった。

俺は缶に残ったペプシを飲み干すと再び外に目をやった。その時にはさっきの二台の車は見えなくなっていて鈴虫の声だけが昼ヶ岳村に響き渡っていた。

第五話 異変

9月30日

この日は俺達が研修旅行を終え、昼ヶ岳とおさらばする日だ。

現在午前6時ジャスト、生徒達の起床時間だ。俺は布団の中で目は覚めてはいるが今までの疲れがたまり1秒でも長く布団の中にいたかった。

サトシや正憲はまだ夢の中において、起床時間になったが誰一人として起きようとはしない。

そんな時サトシの携帯が大音量でアラーム音が流れた。

あ、これは大人気のアニメのoppだな。youtubeでもオタクの皆さんがノリノリで踊っているのを見たことがあるな。

サトシが目を覚ましあわてて携帯のアラームの音楽を止める。

「よ、よお・・・」

サトシが気まずそうにヒロシ達を見る。

「ああ、おはよう」

俺達もようやく布団から這い出て着替えの準備をする。

「いや、あのその、今の音楽はだね・・・」

サトシがあわてながら先ほどのアニソンをごまかそうとする。

俺は別にそこまであわてる必要はないと思っていた。

別にサトシがアニメオタクでもそんな事を笑ったりはしないし、オタクだからなに？っていう感じた。俺もぶっちゃけ映画マニアについてにゲーマーなのでオタクに絶対引いたりしない。むしろオタクならオタクでココソコせずもって誇りを持って！と自分の中でも

そう思っていた。俺達のグループは何かしらのオタクだ。小林は音楽マニアで家には音響の機械がいくつも置いてあり、ユースケも銃オタクで昨日も村の猟師の人達と使っている銃について熱く語っていた。

「あなたたち、のんびりしてちゃだめよ。朝ごはんの前には皆で朝の挨拶があるんだから。一度皆が集まらないと朝ごはんの時間が遅れるんだから」

そういつて部屋の入口に立っていたのは京子先生だ。

俺達は京子先生に挨拶をすると急いで着替えると布団をたたみ、靴をはいて廊下に出た。すると廊下にいる京子先生の後ろにユースケがくっついていた。ユースケが俺達に気付くと挨拶を交してきた。

「ユースケ、いくらなんでもストーカーはやめた方がいいぞ」

俺が冗談混じりユースケに言う。

「失礼な、ストーカーじゃねえ、俺はただ京子先生にお前らが変なことしないか見張っているだけだ」

ユースケが言い返す。

それってやつぱはストーカーじゃね？ と俺は思いながらメンバーと雑談を交わしながら食堂へ向かう。朝の挨拶やミーティングはこの旅館で一番広い部屋の食堂で行われることになっている。

「今日は飯食って、ミーティングが終わったら、後は村の人にも挨拶して帰るんだったよな」

俺が今日の予定を整理しながら話す。

「まあ、いろいろあったけど楽しい思い出も作れたからな」

サトシも廊下を歩きながら話す。

「楽しい思い出は沢山作れたけど、帰りのバスであの道をまた通るはちよつて」

そう俺が話している時だった。

ズズンとした地鳴りが聞こえ旅館が少し揺れた。

「なんだ？ 地震か!？」

小林と山田が少しあわてたように言う。

「震度1か2つてところね。大丈夫、そんなに大きくはなかったわ、それより早く食堂に向かいなさい。もうみんな集まってる頃よ」

京子先生が俺達に急いで食堂に行くよう促す。

食堂では生徒と先生による朝の集会が終わった後、そのまま朝食の時間になった。

俺達はまだ眠そうな表情を顔に浮かべながら、周りから聞こえてくる話に耳を傾けながら朝食の納豆をかき混ぜていた。

俺は味噌汁を啜りながら帰りのバスで体験するであろう乗り物酔いをどう防ぐか、あれこれ考えていた時、旅館の外から ドーン！ とした何かがぶつかる音がした。かなり近い。食堂の一番大きい窓の所へ生徒達がワラワラ集まり始めた。

俺達も何事かと思いい生徒達の隙間から窓を通して外の様子を伺うと、白いワゴン車が旅館の前にある大木にぶつかりひっくり返っていた。

村の人達も家や畑からゾロゾロ集まりだしてきた。

「いつたい何があったんだあ!？」

「あの車が向こう側からものすげえスピードでとんで(走って)来たんだ。なんか知らんが、フラフラして危なっかしいと思ったらその木にぶつかったんじゃ」

「そらあ飲酒運転でねえか」

「とりあえず診療所の今川さんと呼んで来い！ それから巡査さんもじゃ！」

窓が開いていたので村の人達の会話のやり取りが俺たちのいる食堂まで届いてきた。

その場にいた人は鍬やシャベルでフロントガラスを割って中にいる人を助けようとしている。俺はその時ワゴン車のフロントガラスに赤いモノが付着している見た。

…血だ…

俺と同じように血を見た生徒達が騒ぎはじめた。

「全員テーブルに戻りなさい！ 絶対に外に出たりしないこと、いいな!!」

文ちゃんが怒鳴って生徒を席に戻す。

外の様子は文ちゃんがカーテンを閉めてしまったので外を見る事は出来なかった。俺は血を見て削がれた食欲の事を無視して朝食に出されたものをすべてかきこんだ。

朝食が終わった後も生徒達はざわついてた。ザワザワとしたいろんな声が混じった音が食堂中に響き渡っている。

その時、先生方が食堂に入ってきて前にある小さなステージに上り、予定通り研修旅行最後のミーティングを始めた。

「えー、それではこれからミーティングを始めたいと思います。皆さん先ほどの自動車事故を目撃して大変ショックを受けているかとは思いますが村の人達が協力して中にいた人を外に出して先ほど診療所の先生も来られたので皆さんは何も心配することはありません。えー、それではまず、この研修旅行で皆さんに沢山の事を教えてくださった花岡さんと、この旅館の支配人の山田さんに皆さんへのご挨拶していただきしたいと思います」

教頭先生がマイクで話しながら、花岡さんと山田さんと呼んだが二人ともいない。トイレにも行っているのだろうか。

「えーと、花岡さんと山田さんがまだ来られていないようなので先生方からお話をしていただきます」

そう言った教頭先生はマイクを保健担当の福島先生に渡した。

先生方の挨拶が一通り済んだ時だった。

トイレにも行っていたのか、花岡さんがゆっくり食堂に入ってきた。

「あ、それでは皆さんに貴重な体験や、今まで知らなかった自然の魅力を教えてくださいました花岡さんに拍手を！」

花岡さんが食堂に入ってきたことを確認した先生は生徒達に感謝の念を込めて拍手で迎えるように言った。

拍手のなかをゆっくり歩いてくる花岡さん。

俺はステージまで歩いてくる花岡さんの様子が少しおかしい事に気が付いた。風邪でもひいたのだろうか、花岡さんはフラフラと足元がおぼつかない感じで、マイクを握っている文ちゃんに近づいて行った。

「それでは、花岡さん今まで本当にお世話になりました。どう

ぞ、生徒の皆にも花岡さんから何か心に残るメッセージを」そう
言って笑顔で文ちゃんが花岡さんにマイクを手渡そうとした時だっ
た。

花岡さんは差し出されたマイクではなく
突然文ちゃ
んの腕に噛みついた

さっきまで食堂の中を満たしていた拍手は急に鳴り止み、俺達は
目の前で起こっている状況を理解出来なかった。

「ちよつと・・・何するんですか！ 花岡さん！」

文ちゃんが顔を歪めながら、花岡さんの額の部分を噛まれていな
い方の手で掴み抑える。

生徒達の中には目をふさぐ者や、あれは演技でやっていると思
い何人かの友達と笑っている者もいた。俺は冷静になつて考えた。

確かに花岡さんは周りを楽しませてくれる人柄だったが、一部が
見て嫌がるようなことは絶対しないタイプだ。じゃあ、いったい
どうして花岡さんは文ちゃんに噛みついてるんだ？

ゴトッ

何かが床に落ちた音がした。

俺や他の生徒達が文ちゃんと花岡さんの方を見ると花岡さんの口
の周りは真っ赤に染まり、着ているワイシャツの前は文ちゃんの血
で赤黒く染まっていた。

立ち上がってゆっくりこちらに向かってくる花岡さんの後ろには
文ちゃんが右の腕を左手で抑えながら床にうずくまっていた。

俺は文ちゃんの左手で押さえている右の真っ赤になった腕を見て
腰を抜かしそうになった。

…右手が無い…

さっきの何かが落ちたような音は、花岡さんに喰いちぎられた文

ちゃんの右腕だった。

「きゃああああー！！！！」

女子の甲高い悲鳴がいくつも食堂の中から聞こえる。

俺と同じように文ちゃんの手が喰いちぎられたことを見て悲鳴を上げてその場から逃げだす生徒が何人かいた。ステージの前の方で話を聞いていた1組の男子生徒が逃げようとしてバランスを崩し2、3歩走ったところで転んだ。

その男子生徒に花岡さんが両手を伸ばして掴みかかる

「俺の生徒に手を出すんじゃないやねえ！！」

文ちゃんが立ち上がって怒鳴り、花岡さんのワイシャツの襟を噛まれていない左手でつかみ、足を掛け思いっきり投げ飛ばした。

花岡さんは近くのテーブルに叩きつけられ、体がテーブルにぶつかる音と何かが折れるような音がしてその場に倒れたかのように見えたと

しかし花岡さんは何事もなかったように立ちあがった。花岡さんの左腕は関節がない所で折れ曲がっているのに。普通なら痛みで転げ回ってもおかしくないような怪我だったが、そんな事はお構いなしにフラフラと歩き出した。

今度はまた文ちゃんに向かって歩き出した。

「生徒全員は各自、自分の部屋に逃げろ！絶対何があっても部屋の外には出るなあ！！」

文ちゃんは先ほど取り落としたマイクを拾うと大声で生徒達に逃げるように指示を出した。

その指示で生徒全員が食堂から逃げ出し廊下を走って部屋まで逃げた。

俺は見た。

文ちゃんに襲い掛かってい花岡さんの太ももの裏に何かでえぐられたような傷があったのを。

第五話 異変（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

第六話 決意

訳が分からない。何で花岡さんが文ちゃんを襲っているんだ？意味が分からない、分かんねえ！！

俺達は考える事をやめ、自分の部屋に逃げ込むことだけに集中した。

その頃食堂では花岡さんに噛みつかれた文ちゅんに先生たちが手当てをしなが暴れる花岡さんを取り押さえていた。

「なあ、ヒロシ何でだ。何であんなにいい人だった花岡さんが文ちゃんを？」

サトシとユースケが俺に問いかける。

俺にも、いや誰にもそんなことは分からなかった。

「そんな事分かる訳ねえよ！とにかく部屋に急ぐんだ！！」
俺が廊下を走りながら、二人に答えられる応えを返す。

俺達が階段を上るためにロビーの角を曲がろうとしたときだった俺は壁にもたれて座り込んでいる人を見つけた。
なんだ？ そう思い俺達はその人に近づいて行った。

「どうしたんです」
俺は最後まで言い終わる前に反射的にその人から目を背けた。
座り込んでいた人の後ろの壁は赤ペンキの缶をぶちまけたように真っ赤になっていた。

そして、その赤色になった壁の前に座り込んでいる人は頭部が無くなっていた。

「おい、ヒロシ」

サトシと小林が後からついてきてたつた今俺が目を背けたものを見てしまった。

二人が俺と同じようにソレから目を離すと今度はサッカーボールを小さく、いびつな球状の形をしたものを見つけてしまった。それは最早、説明するまでもなく座り込んでいる人の頭部だった。

「やま・・・だ・・・さ・・・」

小林は言い終わる前に、その光景に耐えられなかったのだろう、近くのゴミ箱まで走ると胃の中のを全て吐き出した。

その人は間違いなくホテルの支配人の山田さんだ。山田さんは頭部を喰いちぎられ腹部を裂かれていくつかの臓器が見えており、無傷だったのは両足だけだった。俺もサトシも腹部からこみ上げ吐き気に襲われた。

だが、ここでぼさつとしていたら、俺達も文ちゃんや山田さんのようになると思い、全力で吐き気を抑えた。

俺がゴミ箱で嘔吐している小林を落ち着かせ、部屋に逃げ込むように促す。

小林もここに居たらこうなることが分かったのだろう、口のまわりを手の甲で拭くと再び部屋に向かって走り出した。

途中で何度か悲鳴や鳴き声が聞こえてきた。だが、今は部屋に逃げ込むことが第一だ。薄情かもしれないことは皆分かっていた。しかし今の俺達に出来ることは身の安全を確保して今いる仲間を互いにカバーすることしかできなかった。

3階に着いた。俺達の部屋はこのフロアの西側の一番端っこだ。そこへ向かって走っている時、何人かの人影が見えた。

「ユースケ！ 冴！ 諏訪子！」

俺が叫ぶとその場に立ったり座り込んだりしている生徒は、俺達

の存在に気づき二人がこちらに駆け寄ってきた。

駆け寄ってきたのは冴とユースケだった。冴は涙目になりながら話そうとするがパニックに陥っていて何を伝えたいのか分からなかった。すると、隣にいたユースケが深呼吸を何回か繰り返して俺に今の状況を話した。

「鍵を落したみたいなんだ、多分ここに来る途中で。頼む！ そのうちの部屋に入れてくれ！！」

ユースケが俺の方を掴んで懇願してきた。無論、俺がそれを断ることはしなかった。ユースケは俺がオーケーのサインを出すと抱き着いて礼を言った。俺が学生服のズボンのポケットの中を探ると308号室と書かれたプラスチックの四角柱の棒が付いた鍵を取り出した。

その場にいた生徒達が感嘆の声を上げているが俺はそんな事には構わず全員を部屋に入れると急いで鍵とチェーンを掛けた。

「皆、大丈夫だったんだな」

俺が全員の無事を確認すると少し安堵したように静かに言った。俺達の部屋には自分のクラスメートや他のクラスの生徒が自分を含めると11人いた。全員下を向き部屋の隅で泣きじゃくっている女子もいれば、トイレや洗面所で吐いている生徒もいる。

「大丈夫も何もホントになんなんだよ、アレは」

小林が窓のカーテンを開いて悲痛な声を上げる。

昨日まで農機具をもった村人が挨拶しながらすれ違っていた旅館の前にある道には、数は40程だろうが、花岡さんの様に人を襲ったり、追いかけまわし、噛みついていたりしている人があちこちに見る

ことが出来た。

「ねえ、警察に、警察に早く電話を」

冴はパニック状態からなんとか抜け出すことはできたみたいだが落ち着いてはいない状態だった。それは当然の事だ。

「チクシヨウ、圏外だ！」

携帯を取り出し画面の電波状況を見ながら部屋の中を歩き回っていたユースケが舌打ちとともにそう吐き捨てた。

「そうだ、携帯がだめでも固定電話なら」

諏訪子が言い終わる前にサトシが言う。

「それもさつき試したけど、全然つながらなかった。どうなってるんだ一体！」

「まさか、停電？」

冴がふと思ったが部屋の電灯の豆電球はついていていた。

「そうだ、とりあえずテレビ点けてみるぞ」

サトシがリモコンを拾ってテレビを点ける。

「ですね。はい、それでは次はお天気で

す。お台場から中継しています東さーん」

テレビを点けるとお天気キャスターがお台場から今週の天気について解説している。東アナウンサーの後ろではカメラを意識して小学生がカメラに手を振っていた。

「おい、別のチャンネルに変えてみる」

俺がそう言うとサトシがチャンネルを変える。

「現在、話題沸騰中の韓流音楽グループが関東空港に来日中！！
この後テレビ朝陽流あさひるが独占インタビュー」

「それでは、次のニュースです。在日外国人から違法献金を受け取っていた与党議員ですが」

「・・・はい、森山さん、先週起きた竹島周辺の韓国の漁船が日本の海上保安庁の船にぶつかった事件ですが森山さんはどう思われ

」

「昼ヶ岳の外は何も起こっていないのか!？」

俺達が困惑したようにテレビを見て言った。どのチャンネルに変えても昼ヶ岳のような異変は起こってはならず、日常の風景が映し出されていた。

テレビでは街の人に韓国漁船が日本の海上保安庁の船に体当たりした事件をインタビュウしている。他のテレビも街の様子を生中継していたが昼ヶ岳のような惨状にはなっていないかった。

ドアの外からは呻き声が聞こえてきた。そして、その声の音量は徐々に大きくなってくる。アイツらが3階まで上がってきたのだ。その時だった。

「助けて、ここを開けてお願い!!」

二人の女の子の声が聞こえてきた。俺は急いでドアに駆け寄るが、が叫んでいた女の子の内一人の声が断末魔に変わった。

チエーンを解除しながらのぞき窓から外の様子を確認する。すると男子生徒がドアの前にいた女子生徒の一人に喰いついていた。もう一人の女子が嘔みつかれている方の女子生徒を男子生徒から

引き離すべく引つ張っていた。

その男子生徒に俺は見覚えがあった。去年、俺達が一年生だった頃にちょうど俺の隣の席に座っていた 浜川 という生徒だった。浜川は噛みついていてる女子の腕を喰いちぎった。腕を喰いちぎられた女子生徒は痛みのショックで気を失ったのかその場に倒れた。倒れた様子は確認できなかったがそばにいたもう一人の女子生徒は怒りにまかせ浜川を突き飛ばして噛まれた女子生徒に近寄る。

やっと、チエーンロックが外れた。俺は目の前で起こっていた惨劇やこの部屋に来る途中で見てきたものの恐怖のせいもあって手が震えて思ったようにチエーンロックを外すことが出来なかった。そして最後に鍵を開けようとしたその時、サトシがヒロシの腕を掴んだ。

「なにすんだ!」

俺が掴まれた腕を払いのけながらサトシに食って掛かる。

「バカ、よく考えてみる、お前がドアを開けた瞬間アイツらが入り込んで来たらどうするんだ!？ 俺達も文ちゃんや山田さんの様になるんだぞ!」

サトシが俺の手を掴みなおして俺にドアを開けないように説得する。

「じゃあ、その二人を見殺しにしろっていつのかよ!？」

俺がサトシの手を払いのける。

サトシは堪忍袋の緒を切らして俺の胸ぐらを掴んで言った。

「なら、今ここに居る11人の仲間がアイツらに喰い殺されてもいいのか!？」

俺はその言葉に衝撃を受けた。

確かにサトシの言うとおりドアを開けたらアイツらが入ってくるかもしれない。アイツらが入ってきたら俺達は武器になるものは何も持っていないので確実に部屋にいる人間は喰い殺されるだろう。俺は再びのぞき窓から外の様子を見た。

すると、さつき浜川に噛まれた女子生徒が起き上がっていた。

起き上がった女子生徒は、浜川を突き飛ばしたもう一人の女子生徒のブレザーのリボンを掴むと、その女子生徒の首に噛みついた。

そして、その時の返り血でのぞき窓が真っ赤に塗られた。のぞき窓が真っ赤に染まると同時に俺は目を離した。

俺はいままで我慢していたものが抑えきれなくなりトイレに駆け込むと一気に吐き出した。

「ちくしょお！ いったい何でこんな・・・！！」

俺は吐いた後トイレに座り込んで便器を叩きながら今の状況を理解できずにいた。

「なんでこうなったのかは分からないが・・・落ち着いたら一度こっちへ来い」

トイレの半開きになったドアの外からはサトシが俺に話しかけていた。俺は水道の水で口をゆすいで部屋に戻ると四角いテーブルの周りに皆が座って俺を待っていた。

「いいか、ヒロシ。お前もそうだが俺達もお前と同じだ。今この村で何が起きているのかは俺達も理解できない。ただ、昨日までの昼ヶ岳とは違う・・・！村中の人間が殺し合いをしている。理由なんか分からねえ。ただ、今分かることはここに居たら危険ということだ」

サトシが落ち着きを保ちつつ話す。サトシも今朝から今までの

出来事もあつたせいか体は時々小刻みに震えてはいたがその震えを殺しながら話し続けた。

「とにかく、まずはこれからどうするかだ」

俺もサトシの説得で今までの考えを捨て、積極的に話し始める。

「どうするかって？」

冴が俺に聞き返す。

「確かに、サトシの言うとおりこのままここに居たら危険だ。

だから、ドアを徹底的に補強して自衛隊や警察が助けが来るのを待つか、それとも自分たちでこの昼ヶ岳を脱出するか」

俺が考え付く限りの選択肢を出す。

部屋にいた生徒の半分は前者を選んだ。その中に冴も入っていた。

「だけど、そうしたらいつまで立てこもるつもりだ？ だいたい

食料はどうするつもりだ、すぐに助けが来るって保証はあるのか？」

俺の考えの後者を選んだユースケが前者を選んだ生徒に聞いた。

「それに電話もまともに使えない状況でどうやって助けを呼ぶんだ？」

更にユースケが切り込んだ質問をする。

その時、一人の小柄な生徒が口を開いた。

「そつちだつて、村中にアイツらがうようよいるのに・・・そんな中に行くなんて、死に行くようなもだよ」

児玉という名前の生徒は俺やユースケに反論する。児玉の言う

ことは一理あるどころか大正解だ。

だが、そうしたらやはり先ほどユースケが聞いた通り助けが来る

まで何日も、何週間もこの部屋でじつと待っていなくてはならない。ただ、待っているだけでも食料はなくなっていくのだから10日もここに待っていれば全員が栄養失調に陥ることになるかもしれない。

だが、そうは分かってはいてもわざわざ危険を冒して外に出るよりは多少の事は我慢してここに立てこもっていた方がいいと兎玉は言った。

「分かった、お前らがそう考えるのなら俺にそれを止める権利はない。だけど、このドアを補強したっていつまでもつか分からない。食料の問題だってあるしな」

俺がそう言うのと立てこもる派の何人かは旅館を脱出することに決めたようだ。

俺はまず部屋から出て何か武器になるものをもって旅館を出ようとする考えを出した。

村から最寄の町へ出るには車があった方がいいが誰も車を運転することなどできない。

だから、隣町までは徒歩か自転車を使い互いにカバーしながら昼ヶ岳を脱出することにした。

冴が俺の近くに寄ってきてこのまま部屋に立てこもるように説得した。だが、俺はそれを拒み村から脱出することを選んだ。

俺は冴にも部屋に立てこもっていたら、救助がいつ来るのか分からないこと、ここでじつとしていてもいずれ食料はなくなって飢えに苦しみながら、必ず来てくれるという保証がない救助を待ち続けることになることを説明した。

冴はようやくうなずいて昼ヶ岳から脱出する側に着いた。

結局部屋には兎玉と山田が残ることになった。俺は二人にも一応説得はしたが、二人は絶対危険な外には出ない考えを貫いた。

それなら、それで無理強いはいしない。

「じゃあ、後は脱出経路だが、ドアの外にはアイツらがいるから窓からロープを使って降りるしかないな。何か長いロープみたいな物はないか？」

サトシが周りに聞くとなにやら押入れに入っていたユースケが何かを見つけたらしく、俺とサトシに話しかけてきた。どうやら天井裏を見つけたらしい。そこを通っていけば別に窓から脱出するというリスクの高いことはしなくて済むだろう。

脱出派が行動するのに最低限の荷物を学生鞆やリュックサックに詰め込むといよいよ部屋を後にする時が来たようだ。

兎玉と山田はここに残るので絶対に生き残るように、それだけを言った後、俺を含む9人の生徒は屋根裏の暗くて狭い通路の中へと入って行った。

第六話 決意（後書き）

ご意見感想、全力でお待ちしております!!

第七話 覚悟

「いいか、ゆっくりでいい。あわてずに少しずつ進むんだ」

サトシが先頭に立ち小型の懐中電灯を片手に屋根裏を慎重に進む。俺はサトシのすぐ後ろに着きサトシをバックアップできる体制で屋根裏の狭いスペースを進んで行く。屋根裏は自由に身動きが取れるほどの余裕など無く、太い梁や敷き詰めてある断熱材をよけながら安全に出られる場所を探す。

その時、サトシが止まり懐中電灯を照らしながら光が当たっている場所を指さす。そこは部屋から天井裏に出入りできる小さな扉だった。それは先ほど俺たちが308号室からここへ入った時に開けた扉と同じものだ。サトシが俺に懐中電灯を向けてバックアップするように合図する。俺はそれを確認すると何枚かの小銭を握ったこぶしをもう一度握りなおす。武器がない状態の場合は、なるべく周りにある生活用品を応用して武器に代用する、俺がポケットから取り出した小銭を握っているのはこぶし強度を上げるためのものだ。これは銃マニアでその手の雑誌や本を愛読しているユースケが教えてくれたものだ。サトシも部屋に置いてあったクリスタルの灰皿を懐中電灯と持ちかえながらなるべく音を立てないようにゆっくりと扉を開ける。

サトシが扉を完全に開くと閉めてある押入れのふすま越しにクチャクチャ という不愉快な咀嚼音のような音が聞こえてきた。

サトシと俺が音を立てないように屋根裏から押入れの二段目に降りて慎重に押入れのふすまを数センチ開けてみる。

押入れの部屋 外 を覗いて俺とサトシは絶句した。そこには、つい先ほどまで食堂で俺のすぐ近くに座っていたクラスメートの谷岡だ。

谷岡は畳の上に真っ赤になって不自然に横たわるクラスメートの腹部から臓器やら人肉やらを真っ赤な血で染まった手で乱暴に取り

出しながらそれを口に運んで、喰って、いた。先ほどの不愉快な音は谷岡の真つ赤に染まった口から発せられる人肉を咀嚼する音だった。

「あいつ、クラスメートを喰ってやがる…」

俺はその凄惨な光景を目の当たりにして胃からこみ上げる猛烈な吐き気に襲われた。サトシもその光景から目を離して口を押える。俺はあることに気が付いた。今、一心不乱にそれまで友達だったであろうクラスメートの人肉を喰っている谷岡の左肩には食堂で文ちゃんに襲い掛かった花岡さんの太ももにあった何かでえぐられたような傷跡があったことを。否、あれはえぐられた傷跡ではなく噛みつかれて喰いちぎられた傷跡だ。微かだが谷岡の左肩の傷には菌型と思える痕跡が付いていた。

「サトシ、この部屋はだめだ。次に行くぞ」

俺は、車酔いとは比べ物にならない吐き気を押え、深呼吸してサトシに屋根裏に戻ることを促す。サトシも口を開いている方の手で押さえながらうなずく。

屋根裏に戻ると、冴やユースケや諏訪子の心配した顔がサトシの懐中電灯に照らされていた。

「ヒロシ、どうだった？」

諏訪子が冴の肩を抱きしめるように持ちながら俺に尋ねる。

「だめだ、次の部屋に行くぞ」

「ねえ、いったいどんなことになっているの…?」

諏訪子が今俺達が見てきた部屋の状況を探ねた。正直に言うべきだろうか…、今俺が見たことをありのまま冴に話したらきつと深いショックを受けるに違いない。俺もあの状況を見て嘔吐したんだ。そして、今も胃から上に突き上げてくるムカつきを何とか抑

えている状態なのに冴に正直に話したりしたら気絶するかもしれない。 やっぱり、黙っておくべきか… 俺が心の中で葛藤している
と冴は自分の肩に乗せている諏訪子の手を静かに払いのけて言った。

「お願いヒロシ君、絶対ショックを受けないって約束するから…
正直に言って」

冴は俺が心の中で心配している事、まるで俺の心の中を読んだか
のように、俺の目をじっと見つめて言った。

「いずれ、ここから逃げる時に今までヒロシ君が見てきたものは
必ず私も見てしまうことになると思うの。 もし、その時気絶なん
かしたらヒロシ君…、皆に迷惑がかかっちゃうから… だからお願い。
話して」

屋根裏の暗がりの中、懐中電灯に照らされた冴の目は怖いほどし
っかり俺を見ていた。 その眼には、`覚悟` が浮き出していた。

俺は冴の覚悟を受け取り、正直に今みた事を話すことにした。
冴の言うとおり、いずれ必ず皆、俺の見てきた凄惨な光景を見
ることになるだろう。 だったら、ここで隠していても何の意味も
ない。 俺はありのまま、今の部屋で見たことや食堂から自分達の
部屋に来るまでに見てきたこと、全て、包み隠さず皆に話した。

「そんな…」

冴や他の皆も俺が見てきたものを話すと黙り込んだ。 冴もショ
ックを受けないから話してくれと頼んできたがやはりショックを隠
せない様子だった。 当たり前だ。 そんなことは分かっていた。
あんな光景を見た事を聞いてショックを受けない方がどうかして
いる。 俺は続ける。

「とにかく、今まで俺達が見てきたことを一旦整理するとだ、文ちゃんや山田さんを襲った花岡さんや谷岡…いや、アイツらと呼ぼう。アイツらは体のどこかに傷跡が必ずあるはずだ。噛みつかれた様な傷跡がな。アイツらに噛まれると理由は分からないがそれまで普通だった人がアイツらと同じように人を襲い始める。いわゆる映画やゲームに登場するゾンビって奴らみたいいだ」
そこまで言ったとき仲間の一人 岡田 が俺の話に反論してきた。

「バカなこと言うな！ ゾンビと違って映画とかゲームで出てくる奴らだろ！？ あれは創作上の産物であって二次元での世界のものだ。こんな現実の世界にゾンビなんかいるわけないだろ！！」
岡田は俺の意見を受け入れずに反論する。

「じゃあ、仮にアイツらがゾンビじゃないとしても今のこの状況がなんか変わるのか？ それに今はアイツらがゾンビかゾンビじゃないかを話しているんじゃないんだ。話をまとめているんだ。だから、頼むから黙って聞いてくれ」

俺がそう言うと岡田は俺に意見を遮られたのが不服だったらしくふて腐れてブツブツ言いだした。俺は岡田を無視して話を続ける。

「とにかくアイツらに噛まれたら俺も皆もアイツらの仲間入りになるかもしれない。実際、俺がさつき部屋にいる時に助けを求めてきた二人の女子の内独りは浜川に噛まれた。そして、噛まれた方の女子は、噛まれた女子を浜川から助けようとしたもう一人の女子に噛みついたんだ」

俺がドアのぞき窓からみた事も皆に話す。

「じゃあ、やっぱり…私たちも噛まれたらアイツらみたいになるんだね」

冴が言う。

「確証はないけど…、でもアイツらに噛まれたらそうなると思えた方がいい」

俺は今まで見てきたことを踏まえて話を簡単にまとめた。アイツらは噛まれていない人を襲って喰らう、噛まれた人は首など生命活動に影響のない部分を噛まれた場合アイツらと同じように又人を襲いだす。これの繰り返しだ。だから、アイツらと出会ったら逃げるか、戦って排除するしかない。

俺がそこまで意見をまとめた時、小林が口を開く。

「戦うって、アイツらをどうするんだ？」

「生きてここを脱出したいのなら、アイツらが襲ってきたらこっちも容赦せずに、アイツらの急所を攻撃するしかない」

「じゃあ、アイツらを俺達が攻撃して、アイツらを俺達が殺したりしたら俺達は殺人者になってしまう、そんなのは絶対に嫌だ！」

小林がそう言ったとき俺も一瞬そう思った。だが、実際にアイツらは俺達を襲ってくるし、最悪、首なんか噛まれたりしたらそこには動脈も通っているしこっちも死ぬかも…いや、殺されるかもしれない。実際、山田さんも俺達の部屋の前に逃げてきた女子生徒だっけアイツらに殺されたんだ。アイツらに話しかけて説得しようなんてきつと無駄だろう、文ちゃんも自分が襲われた時も必死に噛みつくのをやめさせようと花岡さんに言っていた。

俺達を襲って喰らう…いや、殺しにかかってくるアイツらに言葉が通じないのであればこっちも戦わなければならぬ。俺達が躊躇したらアイツらはきつと俺達を喰い殺すだろう。そんな俺は絶対に嫌だ！ まだ、やりたいことも夢もあるのにこんなところで死にたくない！！

…だから俺は…戦う！！

「小林、アイツらに話し合いも通じなければ、アイツらは俺達に容赦はしない。小林も今まで見てきただろ…?」

俺は小林や皆にアイツらは俺達を本気で喰い殺しにかかってくる、アイツらには話し合いなんてものは全く通じない、そしてアイツらに噛まれて俺達もアイツらになってしまったとき今までもずっと一緒にだつた仲間を襲うかもしれないことを説明する。

2、3人の仲間は一応俺の意見に同意はしてくれたが、残りにはやはりアイツらといえども人間を殺すことはできないと言った。

俺が残りの反対派にも戦わなければこちらも危険だと話している時、何かが壊れる音がした。そして壊れた音がした後うめき声が聞こえ男子生徒の叫ぶ声が俺達の今いる天井裏にまではっきりと聞こえてきた。

「まさか!」

俺とサトシと他数人が308号へ向かう。さっき俺達が天井裏に入った時に使った扉から308号室の押入れの天井に降りてふすまを開ける。俺の嫌な予感は的中した。鍵とチェーンを掛けたドアはアイツらにこじ開けられたのだろう、押入れのふすまの隙間からはさつき俺とサトシが見たあの光景が広がっていた。児玉と山田は抵抗したみたいだつたが部屋には5人のアイツらが児玉と山田を喰っている。児玉に至ってはアイツらに囲まれて身体全体を喰われている。山田は倒れていてアイツらに手足を噛まれていた。児玉を喰いつくすと山田にもアイツらは手を出そうとしたが、山田は喰いちぎられてボロボロになった足で立ち上がるとアイツらは手を出すのをやめた。

そしてボロボロになった山田やアイツらは俺達の気配に気付いたのか押入れに向かって手を伸ばし走ってきた。

「やばい、こっちに来るぞ！」

俺とサトシはこちらに向かって走ってくるアイツらから逃げる為もう一度天井裏に急いで戻る。その時俺はたった今見た惨状よりもアイツらから逃げるのに精一杯で催していた吐き気なんかはどっかへ行つてた。

「どうした、部屋で何があつたん…」

「いいから逃げる！アイツらが追ってくる！！」

俺は小林が最後まで言い終わる前に逃げるように皆に促した。

アイツらが追ってきていることを知った屋根裏にいた皆は急いで逃げ出す。アイツらがふすまを開ける音がした。一応扉はしっかりと閉めてはきたがアイツらの力ならすぐに突破されてしまうだろう。

「どこに逃げればいいんだ!？」

ユースケが俺に聞く。しまった、まだ全部の部屋を確認していない。もしどこかの部屋に出た時アイツらが大量にいたりなんかしたら俺達はひとたまりもない。俺は安全そうな部屋を思い出すがそんな部屋は…あつた。確かあそこなら…

「そうだ、こっちに来てくれ！」

俺は旅館の間取りを思い出して今いる屋根裏と頭の中で照合してみる。俺は屋根裏のスペースをそのまま、まっすぐ進んで右に曲がった後、少し進んだところで止まった。

「ここは…?」

「ここならたぶん大丈夫だ！」

そついつて俺は扉を開けると明るい光が屋根裏のスペースに差し込む。

俺は天井から確認してアイツらがいないことを確認すると真つ先に下に降りて安全を確保する。そして俺が天井の扉の所で不安そうに俺を見ている皆に、俺が大丈夫だと言つと皆が天井裏から一人ひとり下に降りてきた。俺達が降りた場所は3階の男子トイレだった。トイレにもアイツらはいるかもしれないと言つていた奴がいたがそいつの心配は杞憂に終わった。確かにトイレには個室を除いてドアがないからアイツらが入ってきているかもしれない、しかし俺はこのトイレは恐らくアイツらがいないと予想していたが俺の予想はズバリ的中した。

なぜ、トイレが安全だと分かったのか訝や諏訪子が聞いてきたが、実はこのトイレ、俺達が研修旅行に来た初日に俺達の学校の生徒がトイレを詰まらせて拳句の果てに壊してしまったのだ。だから、トイレの入り口には黄色い看板とテープが張られていて従業員以外入ることが出来ないわけだ。おまけにこの騒動の中、皆が逃げるとすれば鍵やチェーンロックが掛けられて、立てこもってもしばらくは大丈夫な部屋に行くと思つたからだ。普通なら、黄色いテープが張つてあるスペースに入ろうなんて誰も思わないし、トイレの鍵なんてアイツらのバカ力の前にはほとんど役に立たない。まあ、こんな状況の中わざわざトイレなんかを立てこもる奴はいないと思うが…

俺は黄色いテープを音が出ないようににはがしてトイレから慎重に廊下に出る。アイツらに見つからないように。そしてトイレと廊下の角で外の様子を確認すると自分達の近くにアイツらはいない。俺はトイレの中の皆にOKサインを出すとみんながぞろぞろと、且つ静かにトイレから出てきた。

「うわ、あそこにあんなにいる」

ユースケは俺達が今まで泊まってきた部屋の前に群がっているアイツらを見てマジかよつて表情をしていた。

「いいか、これから音を出さずにゆっくり行動するぞ、絶対に悲鳴や大声を上げたりするなよ、アイツらが集まってくるからな」

俺がそういうと皆が静かにうなづく。まだ決心がつかない様子の仲間が何人かいたがずっとこの場に留まりつづけていたらアイツらに見つかってしまう。決心がつかないやつはなるべく俺達がかバ―するしかない。だが、それにも限界はあるが… 今度はサトシではなく俺が先頭に立ち皆をリードする。

「いいか皆、覚悟していけよ」

俺がそう言って全員がうなずいた事を確認すると、俺は行動に出た。俺の後ろをサトシやユースケ、冴や諏訪子達が続く。

俺達はこんなところで絶対に死んでたまるか。

その強い気持ちだけを胸に秘めて俺達は3階の階段を慎重に降りて行った。

第八話 武装

俺達は周囲の状況に気を配りながら階段を下りて行った。3階、2階と階段を音をたてないように一歩ずつ進んでいく。アイツらはまだ見ていない。

俺は1階の踊り場に降りるとサトシ以外をその場に待機させ、俺とサトシはアイツらがいないか確認する為に貧弱な武器を構えて1階フロアに出る。冴達が心配していたが、今は身の安全を確保する為、多少の危険は仕方がない。俺とサトシが目と目で合図を送り互いにカバーしながら1階フロアに出る。

「…クリア」

俺とサトシがアイツらがいないことを確認して冴達を誘導する。さつき部屋に逃げる時通った廊下を今度は逆に進みながら最初の目的地に向かう。最初の目的地とは物置だ。物置なら武器になりそうなものもあるだろう。俺達が宿泊しているこの旅館は自然と共生することを売りにしているので畑も所有している。だからシャベルや鍬などもあるだろうし、今俺達が装備している小銭を握った拳や部屋に置いてあった灰皿なんかよりは少しはマシな武器を得ることが出来る。

「あつた、あそこだ」

先頭を進んでいた俺は玄関からさほど離れていない場所に（倉庫）と書かれた扉を見つけた。俺はすぐさまドアの取っ手を掴み開けようとした。

「くそ、鍵がかかってやがる」

ドアには鍵がかかっていた。

「サトシ、鍵はどこにあると思う？」

「そうだな、この旅館のメインは客が畑で実際に農作物を収穫出来るのが売りだからな。きっとフロントか事務室みたいに客が畑に行きたいって言えばすぐに取り出せる場所に置いてあると思うぞ？」

サトシがそう言うのと俺はすぐに近くのフロントに駆け出した。…鍵はあった。俺はテーブルの横の鍵かけから（倉庫）と書かれたタグの付いた鍵を見つけて皆のいるところまで戻る。

「山田さん…」

首がアイツらによって切断されてしまった支配人の山田さんの遺体に俺は背負っていたリュックサックからジャージの上着を取り出すとそれをそつとかけて手を合わせた。

「ごめん、待たせたな」

俺が皆の所に戻り倉庫のドアに鍵を差し込みドアを開けた。全員が倉庫の中に入ると今度は内側から鍵をかける。鍵をかける直前に俺は周囲を見渡したがアイツらは遠くの方に数えるほどしかない、こちらには気づいてはいなかった。

倉庫には農機具やジャガイモなど保存の効く野菜の他に災害時の為の非常食が置いてあった。俺達は非常食をリュックサックに入っただけ入れて武器になりそうな物を探し始めた。

「お、これなんか良さそうじゃないか？」

俺は棚から手斧を見つけた。その手斧は新品らしく切れ味も良さそうだ。

「そつちはどうだ、何か使えそうな物はあったか？」

俺が聞くとユースケはかなり大振りの鉈を見つけていた。ユースケは見つけた鉈を学生ズボンのベルトに通しながら俺に話しかける。

「ヒロシ、もつとこう、長くてリーチのある物はないかな？ 俺の鉈やお前の手斧にしてもコレを使うにはアイツらとかなり接近しなくちゃいけない。そしたらこつち側のリスクはどうしても高くなってしまう。だから槍の様に相手との距離に余裕が持てる武器を主力武器 メインウェッポン 選んだ方が断然良い。本当は銃があればいいんだけどな… ここは日本だしな…」

ユースケの言うとおりアイツらとは接近戦は極力避けた方がいい。というより絶対に近づきたくない。俺は昔スポーツをやっていたので体力も腕力も学校の体力測定結果によれば平均よりはやや上だ。だが、アイツらには生半可な力なんてほとんど通用しない。現にアイツらは顎の力で体育教師の文ちゃんのを腕を簡単に噛み千切ったし、部屋のドアなんて鍵とチェーンロックを掛けていたにもかかわらず簡単に破られた。だからもし自分の体を掴まれたりなんかしたら本気で死ぬことを覚悟しないとイケないだろう。

「ねえ、これなんかどうか？」

冴は両手にシャベルや竹竿を抱えて俺達によってきた。諏訪子も角材を何本かと木を伐採する大型の斧を見つけてきた。

「おお、それは使えそうだな」

ユースケは俺よりも早く冴達が見つけてきた資材を手にとった。

「ヒロシ、その道具箱を取ってくれ」

ユースケは俺に倉庫で見つけた道具箱を持ってこさせると、その中身を取り出しヤスリやノコギリを取り出した。ユースケはヤスリを握ると冴の見つけてきたシャベルの穴を掘る金属の部分を丁寧に磨き始めた。

「おいユースケ、何を…？」

「シャベルつてのは先端を刃物みたいに研ぐことで武器として使える。実際ロシアなんか戦場での接近戦ではシャベルを武器に使っていたんだ」

そう言つてユースケは一心不乱にシャベルの先端をなるべく音を立てないように研いでいく。

「そうだヒロシ、シャベルはもう一本あるからそいつを研いでくれ、サトシと小林はそこにある竹竿をノコギリで斜めに、出来るだけ鋭く切ってくれ、3〜40度くらいに。音はなるべく立てないよにな」

ユースケが俺達に指示する。ユースケはこういう類は得意なのでこいつに任せておくべきだろう。

「ふう、出来たぞ」

十分後、俺達はシャベルを2本研ぎ竹槍も5本作ることが出来た。

「ひとまずは、こんなもんだな。さっきまでの武器と比べたら少しはマシになったな」

俺は出来上がったばかりの武器を並べて倉庫から出る準備を始めた。

「よし、それじゃあ武器の配置だがシャベルはヒロシと俺、伐採用の斧はサトシ、他の男子は荷物を持ってもらうから角材を装備してくれ。女子は一応竹槍で、諏訪子とコノハは体力がありそうだから角材を頼む。それからメインウェッポンが壊れたりしたときの為に鉋や手斧、バールやレンチをサイドウェッポンとして取り出しやすいところに装備してくれ」

ユースケは皆の体力や行動時の事を考えて装備品を選別した。それは全体的にバランスが整っていた。

「それじゃあ皆、準備いいか？」

俺が今一度皆に覚悟を聞くとさっきとは違いほとんどが戦う覚悟を決めていたようだ。俺はそのことを確認すると自分の荷物を持ちドアのカギを静かに開けた。俺とサトシは研ぎたてのシャベルを構えてドアノブを開ける。ギーという音が倉庫の中に響く。10センチほど開いたドアの前で俺はシャベルを両手に握りしめてアイツらに備える。俺は半開きの倉庫の扉を足で開けるとサトシと一緒に武器を構えて背中合わせに廊下の前後を確認する。

「クリア」

廊下にはアイツらはいない。俺は皆を誘導して旅館の出口へと急ぐ。

その時だった、アイツらが廊下の曲がり角から続々と出てきた。数は4体だ。俺達は先頭体制に入る。

「いいか、皆絶対に無理と容赦はするなよ！」

「互いにカバーしあうんだ！無理と思ったら避ける！」

俺とユースケが皆にアドバイスをする。皆は武器を構えて互いにバックアップの体制を取ると一斉に前に進んでいった。

俺は一番先頭に立つとアイツらを迎え撃つためにシャベルを構えた

第八話 武装（後書き）

更新が遅くなってしまいました。おまけに今回の文章は短めですがこれからはジャンジャン小説を更新していくので応援して頂けると幸いです。

ご意見やご感想もお待ちしております！

第九話 戦闘

「俺とヒロシが先頭に出る！サトシと小林は俺らの空きをカバーしてくれ、男子の残りは一番後を固める。女子は後方支援！」

ユースケが戦闘員の配置を支持する。俺達はユースケの言った通りの場所に着く。アイツらとの距離はすでに10メートルを切っている。ユースケは深呼吸を何度か繰り返し集中力を高めている。俺もユースケに習い心臓の高鳴りを落ち着かせる。

…すー…はー…

…すー…はー…

すー

アイツらが獣に似たような唸り声をあげて近づいてくる。俺がシヤベルを構えた瞬間、アイツらの中の一体が俺達の5メートル手前から走り出した。俺はシヤベルを地面に杭を打ち込むハンマーの様に振り上げて目の前に迫ったアイツを迎撃する。

ザグッ

俺はシヤベルをアイツの右肩に振り下ろした。アイツは右肩に食い込んだシヤベルの事なんか気にせず俺に左手を伸ばしてきた。俺はすかさず目の前のアイツに右足で思いっきり蹴りを入れた。アイツがバランスを崩して床に倒れこむがそれでも立ち上がった。

「……コイツ……！」

「ヒロシ！急所だ、頭を狙え！！」

ユースケが怒鳴る。俺はシヤベルを振り上げて頭に狙いを定める。あとは思いっきり振り下ろすだけだ……それだけなのに……

「……クソッ！！」

俺はシャベルを振り上げたまま動きを止めてしまった。俺が止まっている間にもアイツらはじりじりと距離を縮めてくる。そしてアイツらは走り出してきた。

「チクシヨオ！許せえ！！」

俺は床に倒れているアイツに狙いを定めて目を背けてシャベルを振り下ろした。

ザグリッ

固い物を粉碎する音が廊下に響き白い壁にいくつも赤い染みが出る。俺は足元に転がっているさっきまで俺を襲おうとしていたアイツが頭から血や白い物を出して動かなくなっているのを見て思考が止まった。

「俺……俺は……」

俺は自分がヒトを殺したことを実感した。自分の白いワイシャツにポツポツと着いてる赤い染みを、シャベルにべったりと着いた血を見てその場に立ち尽くしていた。

「ヒロシ！ぼーっとしてんじゃねえ！死にてえのか！！」

誰かがそう怒鳴ったのが聞こえた。俺は揺れている自分の心無矢理落ちつけさせ自分に言い聞かせた。

「躊躇したら俺は、仲間がアイツらに喰い殺される。アイツらは話し合いが通じないんだ、俺達を殺しにかかってくるんだ。山田さんや文ちゃん、花岡さんや……児玉や山田の様になりたくない、死にたくない！！」

「うおらあああああああああー！！」

俺は走り出してきたアイツらの内の一体に先ほどと同じように頭部にめがけてシャベルを振り下ろす。先ほどと同じようにザグッと

いう鈍い音と共に床に崩れる、それと同時に三体目が接近してきた。俺は体制を立て直していないので攻撃することが出来ない。だめだ、殺される、もう間に合わない。走ってくる二体のアイツらがスローモーションの様に近づいてくる、頭では認識しているのに体が動きについて行かない。俺はシャベルを握ったまま目を瞑り、噛まれてアイツらの仲間入りになることを覚悟した。

ザッ

血しぶきが上がった。俺は恐る恐る目を開いた。アレ、痛くない……？

「ぼーっとするなって言っただろ！！」

ユースケとサトシがシャベルと斧で走ってきた二体のアイツらの頭をつぶしていた。俺は……噛まれていない……！！

「ヒロシ、俺もお前と同じだ！同じ気持ちだ！！今、お前が思っていることは俺も思っているんだ！とにかく、ここを脱出することだけを考える！」

「そうだけヒロシ！今は余計なことは一切考えるな！！俺達と一緒に生き残ることだけ考えてろ！！」

「ヒロシ君、私も同じ気持ちだよ！皆で一緒にここを出ようよ！あきらめないで！！」

「とにかく前を警戒して進むんだぜ！」

サトシ、ユースケ、冴、諏訪子、正憲に小林、コノハや早苗が俺に言葉をかけてくれている。

そつだ、俺はこんなところで止まっていちゃいけない。こんな所でやられちゃいけない。まだ、やりたいことも沢山あるんだろ？夢もあるんだろ？だったら……ここを生きて脱出しようじゃないか！！

「みんな、ごめん……」

俺は皆に謝った。なぜか謝らなくちゃいけない気持ちになったから

だ。

「お前が謝る必要なんてこれっぽっちもないぜ」

「そうだ、何で謝るんだ？言っただろ、俺もお前と同じ気持ちだ
って」

皆が床に転がっているアイツらをそっちのけで微かな笑顔を見せた。その笑顔は俺に勇気を与えてくれた。

「それじゃあ、アイツらがまた来ない内に外へ脱出するぞ、いつ
また、どこで襲ってくるか分からないからな」

俺はまた皆の先頭に立ち廊下へ進んでいった。

廊下の状況はひどいことこの上なかった。壁や床は真っ赤に血塗られてる上に首や頭部、心臓などといった生命活動に重要な役割を担っている部分に損傷を受けた生徒は無残に食い散らかされてほぼ10メートルおきに床に転がっている。プロの軍人や検察官などといった職業柄死体を見慣れていてもないかぎりその光景を見たら大抵の人は気絶するか発狂するだろう。俺自身もさつき部屋の前の女生徒が噛まれた瞬間や山田さんの死体を見ているので今こそ正気を保っていられるが、本当にもう少して気が変になりそうだった。いや、今でも発狂しそうなんだ。

俺は溢れそうな気持ちを抑えながら出口に向かって走り出した。

生きてこの昼ヶ岳村から脱出するために……！

食堂の手前を通る。前後にアイツらはいない。俺は恐る恐る食堂の中を覗いた。何も食堂を通らないと旅館から出れないことはない。ただ俺はひとつ気になっていたことがあったのでそれを確かめる為に食堂へ入っていった。

ほんの数時間前まで皆でここで朝食を食べていたのに……どうしてこんな事に……!? いや、考えるのはもうやめたはずだ。考えたって時間の無駄だ。この騒動には何らかの原因があるはずだが、今俺達にそれを突き止める事なんて到底出来やしない。だから今は生きて昼ヶ岳を脱出するということしか考えない。

俺が確認したかったことは先生が何人生き残っているかだ。数時間前、食堂で文ちゃんが花岡さんに噛まれた時に先生方、特に男性教員が花岡さんを取り押さえていた。

あの時俺達はもちろん大人である先生方でさえ……いや、あの場にいた人間は誰一人こんな事態になるなんて思ってもいなかった。だから、噛まれてケガをした人には今までのただのケガと同じ要領で手当てをしようとする。噛まれた人間はアイツらと同じように人間をおそって噛みつく、このサイクルに気が付いて自分の身を守らないとこの連鎖はおそらく永遠に続き、アイツらは仲間を増やし続ける一方だ。ネズミ算式なんてものの比じゃない。

あの場には先生のほとんどが集まり文ちゃんの手当てや花岡さんを止めようとしていた。だから噛まれた先生は文ちゃんだけではないはずだ。

俺はそうなっていないことを祈りつつ食堂の入口の角から頭だけを出して様子を見た。

だが、俺の願いはその状況を一目見て崩れ去った。食堂のステージやテーブルの前にはフラフラと動いているアイツらが多数、2、30はいるだろう。大半が俺達のクラスメートで仲が良かった奴も何人もいる。先生の数は8人くらいだ。この研修旅行には12人の教員が同伴していたので生き残っている先生は多くても4人ということだ。

先生方は最後まで生徒を守ろうとして噛まれた先生もいれば手当てをしている最中に噛まれたのだろう、応急セットを片手にふらつ

いて立っている先生もいた。

俺はやるせない気持ちになりながらも確認しようとしたことは果たせたので静かにその場を離れる。悲しんでいる余裕なんてない。俺達は玄関へと急いだ。

「数は全部で14体か……」

俺は障害物の陰に隠れながら玄関の外にいるアイツらのいる場所を確認する。アイツらの内3体は俺達の十数メートル先にかたまつて死肉をむさぼっていて残りはあちこちに散らばって獲物俺達を探している。

「どう動く？」

俺は隣で武器を構えているユースケとサトシに相談する。

「アイツらは俺らを見つけたらすぐに襲いにかかってくるだろうからな。見つからずに動きたい。前の方にいる3体は死体を喰うのに夢中だからこちらがよつぽど派手に動かなければ見つかることはないと思う……多分……」

「何にしても、アイツらが目の前に来たら倒すしかない。だけど、俺達がアイツらを攻撃すると周りのアイツらも気付くはずだ。そうになったら最悪、俺達はアイツらに取り囲まれるかもしれない。そうになってしまったら終わりだ。だから、しっかり急所を狙って攻撃すること、それと何より肝心なのは出来るだけ無駄な戦闘は避けることだ」

サトシとユースケがアドバイスをする。

「でも無駄な戦闘は避けろって言うけど、玄関から旅館の前の道

までアイツらは沢山いる。そんな中をアイツらに見つからずに動くなんて無茶だ！」

俺が反論する。アイツらはまだ俺達には気づいてはいないものの真つ赤に充血した眼は獲物を探しており俺達がこの場で身をひそめていても見つかるのは最早時間の問題だ。かといって下手に動いたらアイツらに見つかる……いったいどうすれば……？

「せめて少しの間でもアイツらを引き付けられるものがあれば……」

早苗がふとそんな事を口にした。

アイツらを引き付けるもの……誰かが囿になってその間に皆が逃げる……いや、それはだめだ！

他に考えはないのか？俺は！？

俺は頭をかきむしりながらふと何気なく周りを見回した。俺達がいる無駄にでかい玄関には古くて大きな時計と、アイツらに頸動脈を噛まれて死んだ旅館の従業員の死体が転がっていた。

俺はふとあることを思いつくと従業員の死体から携帯電話を漁って電源を入れた。電波の表示は相変わらず圏外だったが別に電話を掛ける訳ではない。

「何してんだ？」

「いいから見てろって」

正憲が尋ねてきたのでタッチパネルを操作しながら俺は応えた。

俺はメニューのツールのアプリをタッチしてアラーム設定をする。音量は最大、アラーム起動時間1分、アラーム音はなるべく派手な音楽を選んで30秒後に起動するように設定した。俺は設定を終えると右手に携帯を握りアイツらのいない庭の端っこあたりに向けて見つからないように携帯を投げた。携帯は薄型だったので俺の思った場所に音を立てて落ちた。アイツらの内の何体かが携帯の落ちた

方向へ歩き出した。聴覚も生きているようだ。

あと10秒……

俺は心の中でカウントダウンを始めた。

…5……4……3……2……

「今だ、走れ!!」

俺は心の中のカウントが1となると同時に皆に言って走り出した。それとほぼ同時に携帯のアラームが起動してハードロックの音楽が大音量で鳴り響く。アイツらは音の発信源の方に目を向けて歩き出す。俺達には気付いてはいない、チャンスだ!

アイツらが音の発生源に向かっていている間に俺達は最初の脱出ルートに出た。道には一体のアイツがいたので俺はシャベルを使って倒す。俺はシャベルに付着した血を振り払いながら後ろについてきている冴に道のりを聞く。

「この道を200メートル進んで二つ目の角を左!後はその道をずっとまっすぐ進めば私達の通ってきたトンネルに行けるよ!」

俺はそれを聞くと冴の言った通りの道を先頭を切って進む。俺達は走りながら襲い掛かってくるアイツらを倒したり避けながら目的地へと急ぐ。本当は自転車を調達するつもりだったがどこから出てくるか分からないアイツらの事もあってやむを得ず徒歩での移動となってしまった。

5分後、俺達はトンネルの前に着いた。俺は周りを警戒しながらトンネルの中へと進んでいく。アイツらはいない。いなかったが俺の目の前には信じられない光景が飛び込んできた。

目の前にできていた茶色い壁、そう、信じたくはなかったが俺達は突然突きつけられたあまりにも理不尽な事態を認めざるを得ない

状況になってしまった。

「おい、いつたいなんだよコレ!？」

誰かがそう言った。

「土砂崩れ……だな……」

俺はただ茫然とその場に立ち尽くした。

「チクシヨウ!」

そう言っつて小林が土砂の山に駆け寄つて素手で土を掘りだし始めた。

「何やってんだよ!早くお前らも手伝え!」

小林が怒鳴るように俺達に手を貸すように言ってきたがサトシがそれを止める。

「小林、無駄なことはやめろ。何メートル埋まっているか分からないし、機械でもないかぎり俺たちにはどうすることもできない。

それにまた土砂崩れが起きる可能性だつてあり得る」

サトシの説得を受けた小林は悔しそうな顔をしながら地面に座り込んだ。

「じゃあ、いつたいどうしろつて言うんだよ!？」

「とにかくここはもうだめだ。一旦引き返して……そうだな、役場が交番に行けば村の地図が手に入るかもしれない。いくら昼ヶ岳が辺鄙なところでも外につながる道はいくつかあるはずだ。それに見てみる、このトンネル、壁や設備がまだ新しいだろ?最近造られたらしい、外にトンネルが完成した日付の書いてある石碑が置いてあった」

「じゃあ、つまり……?」

俺は脱出できる答えがうすうすわかってきた。

「つまり、このトンネルが出来る前まで使われていた道がどこかあるってことだ」

サトシの出したその結論はその場にいた皆に希望を与えた。

「よし、それなら早いこと村の地図を探そうぜ。役場だったら確か魚捕りに行った道の途中にあったはずだ」

俺達はトンネルから出て役場に行くことにした。トンネルの中から出口へ向かっている時俺はふと疑問に思ったことがあった。土砂崩れが起こったのはやはり今朝の地震のせいなのだろうか？俺達が旅館で感じた地震の震度大きくはなかった。トンネル自体はサトシがさつき言っていたようにこのトンネルは最近造られたものらしいし、今の日本の技術ならあれぐらいの地震でくずれるトンネルはいくらなんでもあり得ないだろう。俺は嫌な予感がした。この村中の人間がいきなり人を襲いだした謎の現象や旅館の前で起きた車の事故、そしてこのトンネルの崩壊……一体なんだって言うんだ！？何で次から次へこんなことが起こるんだ？もしかしてこれらに何か関係でもあるのか……？

いや、それは考え過ぎだ。俺も興奮してるんだな、落ち着いていこう。俺は一度深呼吸をした。

トンネルから出た俺達は役場に向かって歩き出した。周囲を警戒しながら十字路を進んでいたその時だった。

「アイツらがいる！！」

諏訪子が叫んだ。俺はすぐにシャベルを構えていつでも攻撃できる態勢に入った。数は10体ほどだ。

「あんなに集まっていたら全部倒すのは無理だ！手近な奴だけ倒して役場へ向かうぞ！」

俺がそう叫んだ時だった。

「こつちからも来ているぞ！数はおよそ20！！」

ユースケが声を張り上げる。俺がユースケのらんでいる方を見ると諏訪子が見つけたアイツらとは反対の方向からアイツらが大量に押し寄せてきている。このままでは挟み込まれてしまう。どこかに逃げ場は……？

十字路の内の一つはさつき俺達が引き返したトンネルの方角へつながっている道で、左右の二つの道はアイツらが大量に押し寄せてきているので通ることが出来ない。そうなると必然的に俺達の前の道を進むしかない。

俺達がアイツらのいない道へ進もうとした時、何体かのアイツらが俺達めがけて走ってきた。アイツらが俺達に襲い掛かろうと手を伸ばしてきたと同時に俺はシャベルを振り回してアイツの急所を狙う。頭部が陥没した感触が俺に伝わってきたがそんな事を気にしている暇なんてない。今の俺にはアイツらを倒すという罪悪感より大量に押し寄せて俺達を喰い殺そうとしているアイツらへの恐怖が圧倒的に勝っていた。

「来るなああああ！！」

俺は叫びながら走ってくるアイツらにシャベルを振り回し抵抗する。

その時アイツらのほとんどが俺達に向かって走り出してきた。いま数体いるアイツらを倒すのに精一杯なのにアイツらが全員かかってきたなら俺達が助かる見込みはまずない。俺はいま倒したアイツの後ろにいたアイツを倒して道を切り開くと皆を誘導しようとした。それと同時に女子の悲鳴が聞こえてきた。冴の声だ。冴はアイツに制服の腕の部分を掴まれて襲われる寸前だ。

「冴を離せ！！」

俺が冴を掴んでいたアイツの頭部にシャベルを振り下ろす。アイツはその場に崩れた。

「やばいぞ、数が多すぎる！！」

すでに十字路はアイツらが大量に押し寄せてきていた。俺達は散り散りにならないように戦ってきたがユースケや正憲、諏訪子達はトンネルの道の方へ追いやられていた。俺達とユースケたちの間にはアイツらが入り込み10人のグループは半分に分断されてしまった。俺達はユースケ達と合流しようとしたが大量に押し寄せるアイツらによって一旦二手に別れるしかなかった。俺は離れてしまったユースケ達に聞こえるように大声でいった。

「役場でだ、役場で待っているからな！！絶対に死ぬんじゃないぞ！！」

俺がそう言うとユースケはかすかにうなずいた。俺は冴やサトシ達を連れてユースケ達とは逆方向の道、そう、本来なら全員で役場に行くはずだった道を走った。離れてしまったユースケ達と無事に昼ヶ岳から脱出出来る事を祈って……………

現在9月30日14時22分

第九話 戦闘（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！

第十話 役場での探索

俺は携帯の時計を見た。現在午後3時20分、大量に押し寄せてきたアイツらによってユースケ達と離ればなれになってからそろそろ1時間が経とうとしていた。俺以外の仲間、冴、早苗、サトシ、岡田は全員ソファアールや椅子でうなだれていた。

「ユースケ達、大丈夫かよ……」

「あれから1時間だな」

俺はソファアールからゆっくりと立ち上がると皆に呼びかけた。

「……皆！ユースケ達とは離れてしまっただけで心配な気持ちは分かる。だけど、俺達はやらなくちゃいけないことがある。だから皆もこれから俺が言つとおりに手伝ってほしい」

「だな、俺達はユースケ達とここで待ち合わせする約束をしているんだ。あいつらが戻ってきたときスムーズに動けるように準備をしておかなくちゃな」

サトシが少し無理をしたように明るく皆に言う。座り込んでいる仲間達が俺とサトシの所へ集まってきた。

「それじゃあ私達は何をすればいいの？」

「まずは昼ヶ岳の地図をさがしてくれ、俺達はここにきてまだ3日しかないし、村の大きさやここにある建物、そして脱出経路を調べる必要がある。それとバリケードの補強だ」

俺は皆に指示をだした。村の地図を探すのは冴と早苗、バリケードの補強は俺とサトシと行う。役場の中には職員が逃げ出した後があったがアイツらはいなかった。だが、念のため冴達には武器の竹槍は持たせておいた。俺達も腰に手斧や鉞を装備していつでもアイツらと戦えるようにしておく。

俺とサトシは役場の中に置いてある机やら椅子などを玄関や窓際に積み上げガムテープで何重にも巻きつけて補強する。鍵のかかったドアでもぶち破るアイツらの腕力の前には意味があるのかと思っただが何もしいよりはマシだ。

「おい岡田、お前も手伝ってくれ。もたもたしていたらアイツらが入ってくるかもしれない」

俺が床に座り込んでガムを噛みながら電波のつながらない携帯をいじっている岡田に声を掛ける。だが岡田は携帯をカチカチやりながら俺達を無視していた。

「岡田！聞こえないのか！？アイツらが入ってくるかもしれないんだからお前も少しは手伝ったらどうなんだ！？」

俺は無視し続ける岡田についてムキになって言ってしまった。すると岡田は携帯を乱暴に閉じて俺達に怒鳴り返してきた。

「うるせえ！！何で、いちいちお前に指図されないといけないんだ！？いつもいつも上から目線で！！大体、アイツらはゾンビなんかじゃねえってさつきから言ってるんだろ！！そんなにバイオハザードごっこがしたいならお前らだけで勝手にやってる！！」

岡田はそう怒鳴ると役場の中にある職員専用の待機室に入ってしまった。

「なんなんだアイツ！？いきなりキレ出して……？」

サトシが岡田の入っていった待機室のドアをにらみつけていた。だが、岡田を戻そうとはしなかった。余計なトラブルは避けたかったのだらう。岡田本人は学校でも自分勝手な奴でクラスの皆に知られていた。学校の掃除はほとんどやらないし、体育祭や文化祭なんかもクラスの体半が夜の7時まで残って練習や準備に明け暮れているのに独りだけそくさと帰る。それでイベント当日には自分も参加したいと言いだして結局皆に迷惑をかける。

俺達は岡田は放っておいて自分たちの作業に集中した。

その時、二階から足音が聞こえてきた。俺は用心の為に腰の斧に手を伸ばした。

二階から降りてきたのは冴達だ。

「あつたわよ！」

早苗が何枚か紙を持ってきた。昼ヶ岳の地図を見つけたようだ。俺達は早速テーブルの上にそれを開く。

「えつと……今俺達がいる役場はここだな。ユースケ達と離ればなれになった場所はここか……」

俺は鞆から筆箱を取り出し赤鉛筆を持つと地図にマークをつけていった。

昼ヶ岳は人口そのものは少ないが建物は結構ある。役場の他に旅館、交番、診療所、雑貨屋、宗教施設、刑務所、精神診療所etc俺は地図に記されている道のりを赤鉛筆でたどってみて絶句した。

「やばい、あのトンネル以外にトンネルがないぞ……！」
地図には先ほどのトンネル以外道が記されていなかった。

「落ち着け、ヒロシ。この地図は去年制作されたものだ、最近の物だから旧道は記されていないんだ」

サトシはボールペンを取り出すと青色で地図を指した。

「道が通っているとしたらこここの二ヶ所だな。昼ヶ岳は盆地型の地形だからこうだった山道は他にもあるかもしれない」

サトシはそう言いながら地図に黄土色や茶色で記された山の等高

線に青色のボールペンでマーキングする。

ー
ー

ブー
ブー
ブ

その時、俺のポケットの中で何かが振動しだした。俺は身体がビクツとなった。びっくりしながらあわててポケットに手を突っ込む。
(携帯か……！？もしかしたらここは電波が通じるのか？)
ポケットの中で振動していたのは携帯ではなかった。

「トランシーバー……あっ！」

俺はサトシが旅館から脱出した際に俺とユースケにトランシーバーを手渡していてくれたことをすっかり忘れていた。

これは、俺が研修旅行一日目に皆にハメられてジューズを買いに行った時にサトシが手渡してくれたアレだ。

「も……もしもし！？ユースケか！？」

俺はトランシーバーを耳に当てる。

「トランシーバーはもしもしじゃねえだろ？そっちは無事に着いたのか？」

「ああ、大丈夫だ。皆で役場に立てこもっているよ……地図も発見して、脱出ルートも今サトシが絞り込んでくれている。それよりそっちはどうなんだ？今どこにいる！？皆は噛まれたりしていないか！？」

俺は頭に浮かんでできた聞きたいことを片っ端からユースケのチームに尋ねた。どうやら皆無事らしい。

「俺達は今大丈夫だが、アイツらから逃げている途中に役場から結構離れた所に来ちゃった。これからそっちに向かおうかと思うが

アイツらがその辺うじゃうじゃいて自由に動ける状態じゃねえんだ。だから今日中にそっちに行くことはできないかも知れない。でもまあ……何とかなるだろ！こっちの心配はしなくていから、お前らはバリケードを作って俺達が来た時の為になんか甘いもんでも用意しておいてくれよな！」

ユースケの明るい話し方で俺達は心から安心した。そして生きる残る希望をしつかりと持ち直した。

「それじゃあ、俺達はこれから移動する。またなんかあったらそっちに連絡するからな。トランシーバーのバッテリーに注意しておいてくれよ！それじゃあ通信終わり」

「……了解！絶対死ぬなよ！！」

俺はトランシーバーをポケットに入れなおした。

そして皆にユースケ達の現状を報告する。皆もユースケ達が無事と聞いて安堵したようだ。

俺は心の中に熱い物があふれるのを感じた。コレが希望って奴なのか……

俺はその中に皆を守って昼ヶ岳から脱出することを誓った。

第十話 役場での探索（後書き）

更新が遅れてしまいました………すいません！

作者はまだ未熟なのでご意見ご感想などありましたらどしどし感想欄やメッセージボックスにご感想ください。

小説に繁栄していこうと思います。

これからもよろしく願います！！

番外編 登場人物紹介（前書き）

ありがとう！！アクセス数8000突破！！

番外編 登場人物紹介

田神ヒロシ（14） 三崎第三中学に通う男子中学生、pani c of infect【昼ヶ岳村編】の主人公。普段は明るいが乗り物酔いが大の苦手。小学校と中学1年の頃にクラス委員長を任されていた。それゆえに皆をまとめることが得意で正義感が強い。過去に運動部に所属していたこともあり体力は高い部類に入る。

森川サトシ（14） ヒロシの同級生、アニメオタク。アウトドア派でもありちよつとしたサバイバル技術もありトランシーバーを常に携帯している。

小学校4年生の頃に両親が離婚していて現在は母親と暮らしている。普段は無駄に明るいがたまに何かを深く考えている様子を見る。

有坂ユースケ（14） 同じくヒロシの同級生、銃火器オタク。趣味はサバイバルゲームやモデルガンの分解&組み立て。本人曰くどんな銃でも3分あれば完璧に使いこなせるらしい。

担任の京子先生のこと大好きでよく先生の後ろにくっついている。それ故ついたあだ名はライジング（光り輝く）ストーカー

清水冴（13） ヒロシのクラスメイトでしっかり者。家はヒロシの家向かい側にあり幼稚園の頃から一緒。ギャルゲー風に言う幼馴染キャラで黒髪ロング。ヒロシに気があるらしいが今の所ヒロシは気付いていない。

島田諏訪子（14） ヒロシの同級生、男勝りな口調とツインテールが特徴の女の子。

女子ソフトボール部に所属しており体力は学年の女子の中でも高い部類に入る。

貧乳、ツンデレ要員。

島田早苗（13） ヒロシとは違うクラスに所属している。諏訪子と同じ女子ソフトボール部に所属している。ショートカットヘアで活動的な所が特徴的。

神奈川コノハ（14） ヒロシのクラスメート。身長は138センチとメンバーの中で一番小さい。いわゆるロリ…妹要素？

体型は一番小さいがスポーツは万能。

田井中正憲（14） ヒロシと同じクラスに所属していて小学生の頃からヒロシ達と過ごしている。電気オタク。

学校ではいつもドライバーやらを鞆に入れていて休み時間や暇なときは資源ごみの日にゴミ捨て場から拾ってきたラジオや時計などを分解、修理していたりする。

間宮京子（24） ヒロシ達の担任、人妻（笑）。ユースケのターゲットで剣道部の顧問も兼ねておりいろいろ忙しい先生。責任感が強く厳しさと優しさをあわせ持ち生徒からの評判もいい。

岡田卓郎（14） ヒロシとは1年の頃同じクラスだった。クラスメイトからは文化祭の練習や掃除を頻繁にサボり自分勝手にやたらと人に文句ばかり言うのでクラスメイトからの評判は悪い。

牧田秀夫（14） ヒロシ達とは隣のクラスに所属している。

文ちゃん（30） ヒロシ達の学校の体育教師。生徒への（愛の）体罰は日常茶飯事で生徒達からの評判は散々だが本当は生徒達の事を一番に考えているハートフル先生。

研修旅行最終日にアイツらと化した花岡さんに噛まれ最終的に文ちゃん自身もアイツらとなってしまふ。だが、噛まれた時やその後も生徒達を体を張って守った。

花岡さん（72） 農家を営んでおり旅館にはグリーンツーリズムで訪れた客の為にボランティアで畑の作物などの収穫の実演を行っている。

ヒロシ達が昼ヶ岳を出発する日にアイツらに噛まれたらしく、花岡さん自身もアイツらの一員と化し文ちゃんに噛みついた。

山田さん（41） 旅館の支配人。ヒロシ達が旅館内を移動している際、廊下でアイツらにより区首を切断された状態で発見される。

兎玉（13） ヒロシとは違うクラスに所属している。ヒロシ達が旅館から脱出する際に山田と共に部屋に立てこもって救助を待とうとしたが部屋に入り込んできたアイツらにより喰い殺される。

山田（13） 兎玉と一緒に部屋に立てこもっていたがアイツらに襲われて、山田本人もアイツらの一員と化した。

伊勢ウドン（19） この作品の作者、愛国心と愛校心あふれる男子大学生。

銃火器と自衛隊が大好きで精神年齢は中学二年生。

好きなもの 日本国、台湾、自衛隊、トランス音楽、東方project、アニメ、ミリタリーetc

第十一話 sideユースケ 行動

ヒロシ達と通信を終えたオレ達四人はまずどこかに落ち着く場所を探すことにした。今、オレ達は廃墟にいる。何も好き好んでこんな場所にいるのではない。ただ周りにアイツらがいなかったからこの場所にいるだけだ。

今オレ達が身を潜めている廃墟は普通の木造二階建てで人が住まなくなつてから既に2、30年は経っているような所だ。かろうじてドアはあるもののガラス窓の大半は長年の風雨に晒されて割れていておまけに誰も手入れしないせいで家の庭には葛のつるやセイタカアワダチソウといった植物がこれでもかといほど生い茂っていた。

部屋の中は埃も積もっており出来る事なら一秒でもここをおさらばしたいがあいにく道には至る所にアイツらがいるので下手に外に出ることもできない。さらに悪いことにオレを含め全員が絶え間ない緊張と何時アイツらに襲われるか分からない恐怖で体力とメンタルをかなり消費していた。体育祭でもこんなに疲れる事はなかった。

オレ達はカビ臭い畳の上に旅館の倉庫で鞆に詰め込んだビニールシートを敷いて懐中電灯を囲むように諏訪子、小林、正憲が座っている。誰も話そうとはしない。オレも皆も何か話を切り出そうとはするがこの重たい空気の中なかなか話を切り出すことは難しい。オレは諏訪子の方に目をやるとオレの気持ち察してくれたのかは分からないがため息をひとつついたらあと話し始めた。

「……………それじゃあ私たちはこれからどうすればいいんだ？ヒロシ達と合流しなきゃなんないんだろ」

諏訪子が話を切り出したおかげで今までこの空間を取り巻いてい

たガチガチの空気が少し和らぐ。

オレもせめて空気をほぐそうと諏訪子に続く。

「ああ、ヒロシ達と合流してそっから昼ヶ岳を脱出。だけどその前にアイツらがかたまっている場所をさがして、そこを避けて動けるルートを確認する必要がある。それと新しい拠点の搜索、今のこの廃墟の外はこんな状況だからもっと安全な建物に避難したい。オレ達で拠点を作るのは、まだ村のどこかで生き残っている先生や友達、村の人間がいたらその人らを保護してこちらの戦力を高めておきたい。こんな状況下では仲間が多いほど仲間全体の生存率は上がる」

「そうだな、アイツらと戦ってきて分かったけど音には敏感だし、こちらが少しでも動いたらすぐに見つかってしまうからな。だから早い内にアイツらを協力して片付けておいた方がいいな。もちろんこの村のすべてのアイツらじゃなくて私達の目の前にいる奴らだけだけ」

俺は今皆ですべきことをまとめて話す。皆真剣な表情だ。

「それと、皆体力をかなり消費している。このまま外に出れば間違いなくアイツらの餌食になる。今から二時間休憩を取る。その間に食事をして体力を回復させよう。この廃墟を出るのはその後だ」俺が言い終わると諏訪子は鞆から旅館で手に入れた缶詰と菓子パンを一人に一つずつ配り始めた。

缶詰など保存の効く食料品はなるべく消費はしたくはなかったがこんな未曾有の事態が起こっている中でしっかりと戦えるように体力だけはきちんと回復させておきたかった。

全員が食事をとり終わり体を休めてからそろそろ二時間が経とう

としていた。オレは片付けをしていつでも出られるようにするよう皆に伝える。陽が上っている内に移動がしたかったのだ。暗くなればアイツらもおそらく俺達を見つけにくくなるはずだが、もし俺達が暗闇でいきなり襲われたりしたらとっさに行動を起こすことが出来ない。オレ達は訓練を受けた軍人なんかじゃない。ただの中学二年生だ。だから避けられる戦闘は避けこちらのリスクを最小限に抑えなければならぬ。こちら側に銃火器などといった武器がない以上生き残る術はそれしかない。

「小林、オレと二階の窓からこの近くにアイツらがいないか確認してくれ。他はここを出る準備だ」

オレはそう言うつと小林と一緒に埃の積もった階段を上って二階に上がる。二階は雨戸が閉じられていたので真つ暗だ。オレは懐中電灯を照らしながら狭い所でも使いやすい鋭い鉋を持ち二階の廊下を進んでいく。武器を構えているのは一応アイツらはいないとは思いが念には念をつてやつた。映画なんかだとゾンビが現れてこないからと言って武器も持たずに部屋の中を進んで行ってお約束通りやられるつてことがよくある。せめてそんな死亡フラグだけは絶対に避けたい。

「やべえ、バイオハザードみたいでめっちゃくちや怖え」

「いいか、もしアイツらが現れたりしても絶対に下手に動き回るなよ。落ち着いて急所を狙うことだけ考えろ。あと変なボタンとかあつても絶対触るなよ」

「ボタンつて……押ししたらその押入れとかからでかい蛇とか出てくるとかか？」

「もし、そんなのが出たらお前を置いて逃げるんでそんな時はよろしくー！」

「なに軽い感じで俺を生贄にしようとしてくれてんだ。そんなことがあつたらお前よりも早く逃げるー！」

「そんならオレはお前より一秒でも早く逃げるわ」

「それならおれは（ry）」

ふざけた会話をしながら雨戸をひとつずつ開けていく。暗かった部屋には外の明かりがさしこむ。アイツらに見つかるといけないので雨戸は必要な場所しか開けることはできない。

「こちら側には二体、そっちは？」

「こっちは見たところいないな。でもあそこが茂みになっているからもしかしたらあそこに潜んでいるかもしれない。潜んでいたとしたら茂みの大きさから考えて二、三体つてところだ」

「了解、それじゃあ東側に行くぞ。皆を集める」

オレは全員が確実に用意できていることを確認するとドアを開ける。静まり返った廃墟の中に傷んだドアの蝶番がこすれる音が響く。この音が外にいるアイツらに聞こえるのではないかと冷や冷やする……

外にはアイツらは見当たらない。しかし陰に潜んでいるかもしれないし考えたくはないが向こうがオレ達を待ち伏せしているかもしれない。油断は厳禁だ。

「よし……皆いいか？」

オレが皆に再度確認すると皆静かにうなずいた。

「行くぞ!!」

オレ達は走り出した。アイツらは追ってきてはいない。

オレ達は事前に廃墟の周りを確認していたので行動はスムーズだった。

「左に一体いるぞ!」

俺の左側をサポートしていた諏訪子が伝える。どこかの物陰に潜んでいたのであろう。アイツはオレ達を見つけるやいなや両手を突き出してこちらに走ってきた。

「……チツ、こつちへ来るぞ！諏訪子、奴のバランスを崩せ！」
「がってんだ！」

諏訪子が装備している角材で思いっきり走ってくるアイツの顔面に突きをお見舞いする。顔面を強打したアイツは後ろによるめいてバランスを崩し体制を立て直すほんの一瞬の隙をつき俺は腰から鉈を取り出して渾身の一撃を頭部に叩き込んだ。

「次が来ない内に行くぞ！」
オレは鉈に着いた血液や体液を振り払いながら言う。
全員がオレの後をついてきているのを確かめながら走る。

物陰から突然飛び出してくるアイツら倒し、押しのけて走り続ける。

「クソツタレ！何の冗談だよ！！俺達は何をしたって言うんだ！」
「？」

小林が叫びながら竹槍で次々に襲い掛かるアイツらの胸部を突き刺す。

その時だった。

「……痛えっ」
諏訪子が倒れこんだ。

「！」
「どうした!?!」

「小林、正憲アイツらを寄せ付けるな！」
オレは前に居たアイツにトドメをさすと諏訪子の元へ駆け寄った。

「どうしたんだ！？噛まれたのか？」

「……ッ、噛まれてない……けど、足が……」

オレは諏訪子の足を見た。

確かに噛まれてはいない。だけどその足は赤く腫れてはいないが捻挫しているようだった。

「大丈夫か！？歩けるか？」

オレは諏訪子に肩を貸す。

諏訪子は大丈夫だと無理に笑顔を作って見せたがすぐに顔の表情が歪んだ。

相当無理をしているんだろう。とにかくこのままじゃ諏訪子だけじゃなく全員が危険に晒される。

ひとまずはどこかで体制を立て直すことが重要だ。

「小林！近くの場所であるべく入口が頑丈そうな建物を見つけろ

！」

「分かった！」

小林はそう言つと近くに駐車してあつた軽トラの屋根に上つて周りを見渡した。

「あつたぞ！ここから200メートルほどの所はかなり大きな家がある！洋風の建物だ！」

「よし、それじゃあそこに向かうぞ！小林は前方は前方、正憲は後方を警戒してくれ」

オレは諏訪子を左の手で支えながら右手に鉈を持ち先を進む。こちらへ向かつて来るアイツらは小林と正憲に排除させる。

「もうちょっとだ！あそこに着いたら手当てしてやるかもうちの辛抱だ」

「悪い……まだほとんど移動していないに……私がドジしたせいで……」

「そんなことは気にすんな！移動なんてまた後でも出来る。今は自分の事だけ考えてる」

オレがそういうと諏訪子は申し訳なさそうな顔をした。小林と正憲も気丈にふるまう。

「着いたぞ。ここか……」

「俺と正憲が中を調べてくる。お前らは玄関の門の陰に隠れてる。一階の安全が確認が出来たら知らせに行くからな」

小林と正憲が先ほど見つけた家の大きな玄関の門をしっかりと閉じると腰の鉈や手斧を持ち家の中へ入る準備をしていた。

… 全体的に洋風色が強く周りの家と比べてもやや建物が大きい。…

… 玄関のドアは空きっぱなしだ。

アイツらがいるかもしれない。

小林と正憲は武器を構え直すと一言「行ってくる」と言って家中へと入っていった。

第十一話 sideユースケ 行動(後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております!!
ドシドシ投稿ください!!

第十二話 side ユースケ つかの間

「そろそろ20分か……」

オレは腕時計を見ながらふと呟いた。隣では諏訪子が不安そうな表情をしている。

今からおよそ20分前、諏訪子の手当てをするためにこの家に立ちよって先に小林と正憲とコノハが一階の安全を確認するために中へ入っていった。

（あいつら遅すぎるけど……まさか家の中で襲われているんじゃない……）

ふと、そんな考えがオレの頭の中にうかんできた。オレはシャベルをもって家の中へ入ろうと思ったがその考えはすぐに捨てた。

第一オレが家の中へ入ってしまったら諏訪子は誰が守る？

それにあいつらはオレにここで待ってると言っただけで家の中へ入っていったのだから、オレが二人の約束を守らなかつたらこんな状況の中グループ内で亀裂が入ってしまったら取り返しがつかないことになってしまう。

だから、オレはあの三人がここに戻ってくるまで諏訪子をまもりながらあいつらの無事を祈るしかない。

オレはもう一度座り直してシャベルをすぐ横に置いて周囲の物音と気配に細心の注意を払った。

隣では諏訪子が何か言いたそうな表情をしていたが自分の怪我で皆に迷惑をかけたことを思っただけで口をふさいだままだった。

「諏訪子、大丈夫だ。あいつらは簡単にやられたりなんかしないって」

「……でも、私のせいで……私がもっと気を付けていれば皆にこんな迷惑なんか掛からなかったのに……」

そついつと諏訪子は声を押えて泣き出した。

諏訪子は昔から男勝りな性格と口調で、今までこんな風に泣いたことなんて一度も無かった。

よほど自分を責めているのだろう。

オレはただ諏訪子を慰めてやることしか出来なかった。

(そろそろ30分か……)

オレは諏訪子に時計を気にしていることを悟られないようにするために少し体を曲げて時計を見る。

1分1秒が5倍にも10倍にも長く感じられた。

(あと10分しても二人が戻ってこなかったら諏訪子を抱えて家の中に入るか……)

オレがそう思った時だった。

「お待たせ。いやー、一階の隅からすみまでアイツらがいないか気を付けてたら遅くなっちゃった。家の一階には誰もいなかった。諏訪子をリビングで休ませてくれ」

正憲が玄関の中から現れた。

オレは仲間の無事を見て安堵のせいかしばらくその場を立ち上がることはできなかった。

「何してんだよ、ユースケ。ほら、諏訪子を運ぶぞ」

「ああ、分かった……」

オレと正憲は諏訪子に肩を貸してリビングへと向かった。

オレは正憲は大量が汗をかいているのに気付いた。半時間もの間にどこに潜んでいるか分からないアイツらに警戒しながら恐怖と緊張に襲われ続けていたのだろう。

(本当にありがとうな)

オレは二人に感謝せずにはいられなかった。

諏訪子をリビングで休ませ手当てを施した後、コノハと諏訪子以外のメンバーは二階の確認に出た。諏訪子のいるリビングには雨戸を閉めて鍵を内側からかけておいてもらう。

「さあ、それじゃあ行くか？」

今度はオレが先頭に立ち二階へと進んでいく。

ゆっくり、且つ慎重に……

この家は周りと比べても部屋数は多いし何より全体的に広い。

しかし階段や廊下は広いと行っても幅は2メートル程度だ。もしどこかの部屋からいきなり飛び出して来たら対処できない。だから怪しい所は三人で連携しながら進んでいくしかない。

「……よし、クリア」

「二階はあと寝室だけだな」

二階にあった部屋は残り一部屋を残してすべて確認した。

オレ達は鉈を構えたまま二階の一番端にある部屋へと入っていった。

「……クリア……いや、ちょっと待て！」

「……………」

俺は部屋のベッドの陰に人が倒れているのを見つけた。足しか見えなかったがスーツのズボンをはいているので男性だろう。俺は鉈を握りなおして近くにより声を掛けをようとしたり。だが、声を掛ける必要は無かった。その男性は腹部を無残に食い散らされて絶命していた。

周りには赤いチョークのようなものがいくつか落ちていて大量の血液が男性を中心に広がっていた。おそらく男性の死因は大量出血による失血死だろう。

オレは男性が生命維持に不可欠な血液を大量に失ったことでアイ

ツらにはなっていない事、つまりは死亡を確認したうえで部屋の中に使えるものがないかを探し始めた。男性の遺体はベッドに安置して顔には白いハンカチをかけた。

オレはふと男性の近くに落ちていた赤いチョークのようなものを拾い上げた。

「シヨットシエル（散弾）だ！」

「え……なにそれ？」

正憲が何か分からないので聞いてきた。

「シヨットガン（散弾銃）の弾だ！このおっさん、銃を持つてるんだ！！」

オレはシヨットシエルを全て拾い集めた。それらは赤鉛筆をやや太くしたような円柱の形をしていて側面には英字や・410という数字が記されていた。俺は空いていたロッカーから入っている弾薬を全て取り出して学生鞆に詰めた。

先ほどの410番口径の散弾や12番口径散弾やスラッグ弾、7、62mmライフル弾を学生鞆に詰め込む。

「さてと、後は本体だな」

「でもこのロッカー、開けられるか？」

オレが素朴な疑問を出すや正憲はかたまった。

因みにロッカーはポピュラーなダイヤル式だ。つまり暗証番号が分からなければもちろん開ける事なんかできない。

「よし……それじゃあちよつと俺に任せてもらおうか」

小林が名乗りを上げた。

「え、なに？お前鍵なんて開けることが出来るの？」

「ああ、昔ちよつとな」

小林が手をポキポキと鳴らしロッカーの前に座る。てか、『昔ちよつとな』ってお前、鍵氏か空き巣でもやっていたのか？

小林はロッカーの前に座ると耳を扉に着けて目を瞑りながらダイヤルを回していく。

なんか本格的だな。

カチカチカチカチカチ……カチカチカチ……

小林がダイヤルを回している様子をオレと正憲が見守る。

「よし、開けてみる」

小林がロッカーの前から退くと正憲が取っ手を握って開けるが

「あの、すいません。開かないんですけど」

正憲が椅子に座り込んでいかにも仕事したって表情を浮かべている小林に言う。

小林が戻ってきて再びダイヤルを回してもう一度扉を開けてみるが……開かない。

「あのさ、ピッキングマスター君。さっき『昔ちよつとな』って言うってたけど全然開かないよね、コレ」

正憲がそういうと自称ピッキングマスター k o b a y a s h i (最初にダイヤルを回していた時小林が調子に乗って自分に着けた名前)は黙った。

「お前、昔なんか鍵とか開けてたりでもしてたの？」

「……いやあ、昔見たアニメとかでこういう風に金庫とか開けてたから……その、自分でもやってみようと思って。ちなみにおれは自分の勉強机についている鍵付きの引き出しを針金で開けた事が……うわちよやめてやめていたいたいゴメン謝るからおまwww」

調子に乗ったエセピッキングマスターをシバいた後結局ボールでこじ開けることにした。
ボールでこじ開けるといっても漫画みたいに簡単なことではない。
ロッカーは盗難防止の為にちよつとやそつとじゃ開かないようになっているからだ。

ロッカーの前で奮闘する事一時間……
ボールでやつと開いたロッカーの中にはショットガンやライフル銃が分解された状態で収納してあった。

それに換えの銃身にスコープ、ドットサイトも。
オレはそれをひとつずつ弾薬と一緒に一階の他の二人が待っているリビングへと運んで組み立ての作業に入った。

銃火器の組み立て方はオレが普段から読んでいる雑誌やネットのサイトでみた事があるし、自分の部屋でも暇さえあればエアガンやらモデルガンを分解、組み立てしているので特に難しいことではなかった。といつても民間用であるとはいえ実銃に触るのはこれが初めてだけど……

「上下二連式散弾銃が一丁と……レミントンM870ショットガン、ブローニングbar、それからウィンチェスターM9410か……」

オレは組み立てた銃火器に弾を装填しながら誰にどの銃を持たせるか思案していた。

「正憲はこいつを使えよ、410番口径の弾を使うから反動もそこまで大きくはない」

オレはウィンチェスターを正憲に渡す。正憲は難しそうな顔をしていた。

「いや、オレは銃の使い方なんて知らないし、まだ角材の方が……」

……
「……チャッキン……」

オレは正憲が言い終わる前にウィンチエスターの装填用レバーを動かして説明した。

「今、オレが動かしたレバーで薬室にシヨットシエルが装填された。つまり、これで撃てる状態だ。撃つた後はもう一度今のレバーを操作してシエルの排出と装填を行う。難しいことじゃない」

オレはブローニングライフルの弾倉に7・62mm 308win弾を装填していく。

正憲は難しそうな顔をしていたがオレが使い方を説明して10分もするとある程度構え方も形になってきた。

「正憲に渡したのはチューブマガジン（弾倉内）に2発しか入らない。だから弾を2発こめたらレバーを一度引いて薬室に弾を装填するとマガジン内に1発分のスペースができる。これをコンバットロードっていう。上下二連以外も同じだ」

正憲は専門用語ばかりで操作に手間取ってはいたがオレが何回か教えるとそこそこ扱えるようになってきた。

小林にはレミントンm870シヨットガンを渡して正憲と同様に使い方を教える。

コノ八には一応上下二連式散弾銃を渡しておくが、この銃は4キロ近くあり、女子が撃つのは難しいだろう。

だからコノ八が撃つときはオレたちがカバーしなければならぬ。

その後、オレは銃器の扱い方を教えると見張り番を決めた。

これは俺たちが休んでいる間にアイツらに侵入されるのを防ぐため

だ。公平にジャンケンで順番を決める。
オレは一番最初だった。

ブローニングbarライフルに可変倍率スコープやバイポッドを
取り付けてオレはベランダに出た。

薄暗い村の中にアイツらとおぼしき人影がいくつも見える。
こんな非日常に放り込まれた中でも村に吹く秋風は枯れ葉の匂いを
運んでくる。

「本当にどうしちゃったんだよ……」
オレはふと無意識にそう呟いていた。

どれ程時間が過ぎたのだろう。オレの時計は見ると22時を指し
ていた。そろそろ交代の時間だ。

オレは正憲に交代の時間が来たことを知らせると、正憲はさつき
まで寝ていたのであるう、眠たそうに目をこすりながらウインチェ
スター散弾銃を手にオレと入れ替わる形でベランダに出る。

オレは朝まで見張りの番はないのでさっきまで正憲が寝ていたソ
ファアで睡眠をとることにする。

オレは横になると今までの疲れのせいもあり一気に眠りの世界に
引き込まれていった。

……誰かの声が聞こえる……ような気がする。

どうやらオレを読んでいるみたいだ。

「……ケ、ユースケ！起きろ！」

小林の声でオレは目が覚めた。時計をまだ午前4時前を指している。

「……うーん、どうしたんだ？」

「ヤバいぞ！外を見てみる！」

小林はかなり焦っていた。その表情からオレは今ただ事ではないことが起こっていることを察知した。

オレはブローニングライフルを持つと二階からまだ日が昇っていない外を見た。

「嘘だろ……」

オレが見た光景は今までとは比べ物にならないくらい大量に集結したアイツらだった。

第十二話 side ユースケ つかの間（後書き）

ご意見、ご感想ジャンジャン送って下さい！！

それはそうと今、作者は奉仕期間中で夜になると朝まで社務所で独りでごさなければならぬので、作者のメンタルを保つためにもどなたかメッセージを送って下さい。

第十三話 side ユースケ 迫りくる死の大群

オレ達を立て籠っている家の周りは既に大量のアイツらによって囲まれてしまっていた。

家の中にはゾンビ映画でもよく耳にする（ヴー）とか（あー）といった声が響いてくる。おまけに中には絶叫するような声をあげている奴もいる。叫び声をあげたいのはこっちの方だったの。

オレ達は家の周囲を囲まれた状態で身動きなんかとれるわけがなくただただベランダからその光景を見ているしかなかった。

「どうすんだよ、ユースケ？アイツらは完全に俺達を狙っているぞ！このままここでいたらアイツらのエサになるのも時間の問題だぞ！？」

「そんなことぐらいわかってるよ！！だけど家の回りをこう囲まれているんじゃどう動いたらいいのかわかんねえんだよ！」

アイツらは徐々に数を増やして今は200体ぐらいまでに膨れ上がった。

かろうじて家の周囲の塀や門は突破されてはいないがそこにもアイツらが押し合いあっついていて遅かれ早かれこのままではアイツらによって破られてしまう。

当に今のオレ達は四面楚歌状態だ。周囲からは敵国の国歌ではなくアイツらの飢えたうめき声が聞こえてくる。

「チクシヨウー！！」

正憲は持っていたウィンチェスターm9410散弾銃のレバーを引いて弾を装填しアイツらに照準を合わせた。

「待て！正憲ー！！」

オレは正憲がトリガーに指を掛けると同時に撃つのを止めさせる。

「何だよ!？」

「落ち着け!よく考えてみる、お前が撃ったところでアイツらは少しも減りはしない。それに銃声で余計に増えるだけだ。弾だつて余裕がないんだ!」

「くっ……」

弾は全部で300発程度だ。全部撃ち尽くしても次々に集まってくるアイツらを全て倒せる保証はない。それに実銃はオレも撃つたことなんてない。だから一発で確実にアイツらに当てることは難しだろう。

「せめて、向こう側の家に移動できれば……」

家の向こう側にはアイツらはほとんど見受けられない。オレ達にアイツらの注意が向いているからだ。

しかし向かい側の家はかなりの距離がある。

道路にはアイツらがひしめき合っているうえ足を負傷した諏訪子もいるので向かい側の家に移ることはまず無理だ。

「とにかく今は撃つことよりもここから脱出することを考えるんだ」

「脱出つたつて家の周りがアイツらで埋め尽くされているのに脱出も何もないだろ!？」

「もう……終りだ!!!」

小林が悲惨な声を上げる。

「なあ、下に車があつたよな?あれを使って……」

「いくらなんでもそれは無茶だ。アイツらが数体ならまだしも、あんなに集まっているんじゃ車がスリップしちまう!せめてもつと

数が少なければ……！」

「じゃあ、おとなしく死ねって言うのか！？どのみちこのままだったら俺達は確実にアイツらに喰い殺されるんだ！だったら生き残る方法を考えて見るよ……！」

正憲は立ち上がって怒鳴った。

確かに正憲の言うとおりだ。このままここでアイツらに殺されるのを待つよりせめて誰か一人でも生き残る事を考えて実行すべきだ。だけど正憲が言うように車で脱出しようとしてもまず間違いなく車がスリッするか、そうでなくても車ごとアイツらに囲まれて車外に引きずりだされるかのどちらかだ。

いずれにしてもアイツらの数が多すぎるから下手に車で脱出できない。なんとかしてアイツらの数を減らすことが出来ないか。

オレは皆にそう伝えた。

「でも車の近くにいた奴らを倒したところで次々に集まってくる。そんなんじゃ全く意味なんてない。焼け石に水だ」

「だったら俺達は……死ななきゃいけないのか？」

正憲は悲観しながらソファアに座り込んだ。

「どうせ死ぬならアイツらに喰われて苦しみながら死にたくない。ユースケ……」

シャコンツ

小林がそういうと持っていたレミントンm870ショットガンのポンプを引いて散弾を薬室に送り込んだ。

「……ゴメン……」

小林は銃身を握って右手の親指をそつとトリガーにかけた。

「一発で死ねなかつたら俺の頭を撃つてくれ。みつともない死体になりたくはないからさ……ユースケ……頼む」

小林は銃口を自分の心臓の上にぴたりとくつつけた。小林の目からは涙がこぼれた。

「おい！バカなことはするな！やめろ！銃を下げる！」

正憲が怒鳴る。だが小林は銃口が心臓からずれないようにしっかりと右手を固定し直してトリガーに力を込める。

「じゃあな……」

小林がぐつと目をつぶってトリガーに左手の親指に力を掛ける……

ガァンッ

銃声が部屋に響き渡り、硝煙の臭いが鼻を突く。オレの上の天井には500円玉くらいの穴がばかりと開いた。オレはライフル銃の反動で痺れる手をよそに天井に向けた銃口を下げて怒鳴った。

「ふざけんな！何がみつともない死体になりたくないだあ！？お前は自殺する方がアイツらに殺されることよりみつともなくないと思ってるのか、何でまだ噛まれてもいないのにそうやって諦めようとするんだ！？」

「ユースケの言う通りだ、まだ俺たちは噛まれて感染した訳じゃない。まだ助かる方法はあるはずだ！簡単に死のうとするなよ！」

オレと正憲が怒鳴る。

小林は手にしていたショットガンを床に置いて自分の行動を悔やんだのか涙を拭いてオレたちに一言謝った。

「気にするなよ、ここにいて誰だって、まだ村に生き残っているやつらだってお前と同じ気持ちだ。それに、アイツらに噛まれて死んだ山田や文ちゃんの為にも生きてここを出ようぜ！」

「そうよ、せっかく噛まれずに生き残っているんだから……ここ

で自殺しちゃったらアイツらに噛まれた先生や皆はどうするの！」「
正憲とコノ八が小林を励ますように力強く言った。

「そうだぜ、小林！まだ助かる方法はきつとある。だから皆で生きてこの村を脱出するために、安全に抜け出せる所を探してくれ！多少アイツらがいても構わねえ、こつちには本物の銃が4丁もあるんだからな！」

「しかし、安全に脱出できる場所って言うっても裏は3〜4メートルはある崖だし、正面はアイツらに埋め尽くされている。両側にも家は無いから塀を越えて行くのは結局はアイツらを掻き分けて行かなきゃいけない……」

早速、脱出経路が行き詰まった。しかし、

「待ってくれ、裏の崖はそんなに高くはない。はしごか何かで登ることは出来るんじゃないか？」

「でも諏訪子はどうするんだ、あいつは足を怪我しているし……」
「そんなことなら皆で協力すればいいだろ、こうしている間にもアイツらは門に集まっている。とにかく時間がない！急ぐぞ！」

オレはブローニングライフルを構えながら裏口につながる台所の勝手口を開ける。

幸い、アイツらはまだ敷地内に侵入してきてはいない。だが、既に押し寄せるアイツらによって門は大きく変形している。

突破されるのは最早時間の問題だ。

俺達は直ぐにあらかじめまとめておいた荷物を持つと正憲に諏訪子を任せて、小林とコノ八を連れて裏にある物置小屋へと急いで向かった。

使わなくなった家財道具やブラウン管テレビが所狭しと置いてあり、梯子は一番奥に置いてあった。

普段なら片付けの事を考えて荷物をひとつずつ運び出して目的の物を取るがあいにく今はそんな穏やかな状態じゃない。

すぐそこには死がリアルタイムで押し寄せてきている。

オレ達は置かれている物を踏み台にして梯子を取る。
その時だった。

「……バキィィ……ン……ン……」

物置小屋からはしごを運び出した時、思わず現実逃避したくなるような音……門が壊れた音が静まり返った敷地に響き渡った。

「……ッ!!」

「まずいよ! アイツらが入ってくる!」

コノハが声を張り上げた。

「銃を構えろ!!」

俺達とアイツらの距離は既に30メートルもない。決壊したダムの水の如くなだれ込んでくるアイツらに、家具で補強したバリケードがあつという間に侵食されていく。

そして、バリケードで一番大きなタンスが崩れた瞬間にアイツらは俺達めがけて一斉に走り出してきた。

……ライフルで応戦してもらちがあかない……!!

「コノハ! ショットガンを貸してくれ!!」

オレは持っていたブローニングライフルを背中に回すとコノハに渡した上下二連式散弾銃を引ったくる。

一番手前の敵までの距離はおよそ15メートル、ショットガンならしっかり構えて狙えば当たるはずだ。

オレはショットシエル(散弾)の装填を確認すると銃床をしっかりと脇で固定して構えて、銃身上のアイアンサイト(目標を狙うときに使う照準部品)とアイツらを素早く合わせて呼吸を整える。

銃口の延長線にアイツらが重なったとき、吸い込んだ息を吐き出すタイミングを逃さずにトリガーを絞った。

ーダアアンツー

エアガンとは比べ物にならないくらいの反動がオレの肩を強く叩き、それと同時に銃身が大きく上に反れた。

銃火と共にオレの放ったおよそ100粒の散弾は銃口の先にいた二体のアイツらをハチの巣にした。

撃たれたアイツらがもんどりうって後ろに倒れる間にもオレは間髪を入れずに二発目の照準を合わせて先程と同じ要領でトリガーを絞る。

一発目を撃った時にコツを掴んだことあり、二発目の反動は先程と比べて少しだけ軽かった。

「リロードする！援護してくれ！」

オレが指示を出す。

小林がレミントンm870ショットガンでアイツらと応戦している間にオレは銃の薬室部分を折り空薬きょうを排出して二発同時にシエルを装填する。コノハも竹槍でオレと小林に近づいてくるアイツらを突き距離をつくる。

小林が3発の散弾を撃ち終わりオレが先頭に出る。

小林が倒したアイツらは2体だけだったが銃の初心者（実銃はオレもだが）にしては上出来だった。

次々と詰め寄ってくるアイツらをオレと小林とコノハが倒している間に正憲と諏訪子のはしごを上り終えたようだ。

「コノハ、先にお前が昇れ！」

「え……でも……」

「いいから、早く！」

銃を持っていないコノハを先に崖の上に登らせる。

次々に流れ込んでくるアイツらをショットガンで撃退しながら小

林も先に行くように促す。

崖の上では諏訪子を運び終えた正憲がウィンチェスター m941
0で後方支援を務める。

弾はアイツらの頭部ではなく足や胴体に当たり倒せてはいないが、
それでも着弾したアイツらはほんの少しだが動きがのろくなる。

オレは装填されていた散弾を撃ち尽くすと梯子へと走る。

オレが梯子の半分くらいまで登った時に何体かのアイツらも走り
出してきた。

身動きが取れない状態で襲われたら終わりだ！

アイツらは運動神経も生きている奴も存在していた。

今、まさにオレを狙っているのはそういうやつだ。このままでは
はしごを上り終えるまでにオレは捕まっちゃう！

小林も正憲も弾の切れた銃に再装填している最中だ。

オレは上下二連をしっかりと肩にかけなおして、背中に回してあ
ったブローニングライフルに持ち換え、スイングベルトで銃と体を
しっかりと固定した。

オレは安全装置を解除して出来るだけ素早くライフルのレイルに
取り付けられたレーザーポインターをアイツらの胸のあたりに合わ
せる。

ライフルは重たかったがそんなことは構っていられない。

アイツらとの距離が残り数メートルになった瞬間にトリガーを引
いた。

銃火がひかって、オレが狙ったアイツらの内一体は顎から上を派
手にまき散らしてその場に崩れた。

「――ガアンツガアンツ――」

もう一体に狙いを定めトリガーを立て続けに二回引いた。

しかし、無理な体制で銃を撃ったこともあって一発目はアイツらの
頭上を飛んでいき、二発目も頬の肉をえぐっただけだった。

コンバットロードを忘れていたので残弾はあと1発、だが、もう狙いを定められる距離じゃない。

すべてがスローモーションに見える。

構えたライフルの半径よりも内側に入り込んできたアイツを倒す方法はない。

――噛まれる――

「ここまでか……」

オレは本気で死を覚悟した。

それと同時に強い耳鳴りがして、ライフルを構えていた右腕に痛みが走った。

「ああ、噛まれちゃったか……まだ、死にたくなかったな……」

オレは強く閉じていた目を、無念の気持ちを感じながら開けた――

オレに狙いを定めて走ってきたアイツは頭部を完全に吹っ飛ばされて地面に倒れていた。

「……何でだ？オレは撃ってないぞ……？」

オレは崖の上を見た。

「ユースケ！早く上がれ！！」

正憲が銃を持ちながらオレに手を伸ばす。

オレは後ろから走ってくるアイツらに追い付かれるまいと急いではしごを登りきった。

アイツらが昇ってこられないように梯子を下に蹴落とす。

「大丈夫か！？」

「あぶねえ、間一髪だったな」
全員が次々に声を掛けてきた。
オレは血の流れる右腕をよく見た。

「ユースケ！……噛まれたのか！？」
諏訪子がオレの傷を見て驚いた。

「……いや、おそらく小林の撃った散弾が当たったんだろうな。
その証拠に歯形はついていない」

「本当に！？」

「良かった……！！」

「悪い、きちんと狙ったけど……上手く当てることが出来なかった。
本当にゴメン！！もしお前を撃ち殺しちまったら……」

コノハと諏訪子に続いて小林が謝ってきた。

小林はオレに弾を当ててしまったことを申し訳なさそうに頭を下げた。

「ナイスアシストだったぜ！小林！お前が撃ってなかったらオレは今頃アイツらに噛まれて自決してた」

「だけど……」

「マジでありがとうな。こんぐらいの傷で済んだんだ。気にすることなんてないぜ！」

オレは傷口をコノハに包帯を巻いてもらいながら言った。

小林には今、オレは心から感謝している。

現在10月1日5時3分、空が薄明るくなりはじめていた。

第十三話 side ユースケ 迫りくる死の大群（後書き）

最近、忙しくてなかなか更新できませんでした。
おまけにスランプに陥っていたので……

しかし最近はいデアも浮かぶようになり遅くて稚拙ながらもこ
こ毎日プロットを練ったり執筆しています。

こんな、ダメ作家ですが感想など頂けたらとても嬉しいです。
これからもよろしく願います。

「ここもアイツらが潜んでいるかもしれない。慎重に行くぞ」
オレ達は銃に弾を再装填してすぐに動き始めた。

オレはブローニングライフルを肩に回して上下二連式散弾銃を構えながら正憲と先頭をきる。

コノハは諏訪子をサポートし、小林には後方を警戒させる。

山の斜面を警戒しながら進むが足元には倒れて腐った木や竹がそこらへんに転がっているので思ったようには進めない。

そろそろ日が完全に昇る。

日が昇ればオレ達も早く移動できるが諏訪子は負傷しているし、明るくなればアイツらの目にもオレ達はつけやすくなる。

だから、早いうちに別の安全な拠点を見つけるか、離ればなれになったヒロシ達と合流しなければならぬ。

時間にして数十分くらいか、オレ達は足場の悪い斜面を歩き続けた。

いかんせん、オレ達は地元の間じゃないので村の中はもちろんの事、こんな山の中はどこへ行けばいいのかだんだん検討が付かなくなってきた。

全員の息が上がっている。絶え間なく続く死への不安と緊張、慣れない山へ、重い装備を持って休憩なしに歩き続けているのだから。しかも諏訪子は足を捻挫しているので無理に動かしたら症状が悪化するかもしれない。

どこかに平坦な場所でもないか……

オレはあたりを見回す。

しかし、そんな場所は見渡す限りない。
とりあえず、動けなくなってしまうたらそこまでなのでいったん荷物を下ろして斜面に腰をおろして休憩をとった。

オレは五分ほど休んだ後、銃と予備の弾薬だけをもって正憲とあたりを散策した。

小林はコノハと諏訪子の護衛の為に残しておく。

二人で歩き続けて1キロぐらい進んだ。

日はほとんど出てきて、周りも徐々に明るくなり始めた。

その時、オレの数十メートル先で人が動いていたような気がした。

「人か……？」

疲れていることもあり、見間違いかもしれないがオレは正憲とそこへ向かうことにした。

アイツらか、それとも生存者か。

もしかしたら、オレの同級生かもしれない。

人影が見えたところまでオレ達は向かってみたが、そこには誰もいなかった。

しかし、そこは六畳間ほどの広さのあるひらけた土地だった。

その土地の真ん中には死体が一人分横たわっていた。

「だめだ、首を噛まれている」

その死体は30代くらいの男性で、首を噛まれていた。

男性はマチェットナイフを腰にさし、近くにはクロスボウとアルミ矢が落ちていた。

「さっきの、人影はこのおっさんだったのか……？」

それにしても不自然な点がいくつもある。

男性は死亡してから結構な時間が経っているのが分かった。服や地面の血は完全に固まっているし、何より頸動脈を深く噛まれているので、出血多量ですでに死亡していて歩き回るのは出来な
いはずだ。

つまり……

「ユースケ！」

正憲がオレの方を見て顔色を変えた。

「……………！」

オレの後ろにアイツが手をオレに伸ばして近づいて来ていた。

「ッ、危ね！」

ダアアン……

銃声が静かな山の中に響いた。

オレに襲い掛かるうとしていたアイツは腹部に手のひらぐら
いの穴が開き1メートルほど吹っ飛んだ。

「大丈夫か!？」

正憲が血相を変えてオレに寄ってきた。

「ああ、危なかった。あとちょっと遅かったら……………」

オレは一瞬背筋が寒くなった。

普段なら思考停止してしまうところだが、今は状況が全く違
うんだ。

止まってちゃいけない。

動き続けなければ、死にたくないのなら。

オレは自分に言い聞かせた。

オレはまだ高鳴りしている心臓を押えて、転がっていた死体と今襲ってきた奴の死体を何か役に立ちそうなものはないか調べ始めた。

「バーネットのクロスボウとマチェットナイフか……、そっちは？」

オレは死体から使えそうな物を取り出すと、さっきオレが倒した奴を調べていた正憲が興奮しながら荷物を持ってきた。

「すげえよ！この爺さん、ライフルをもっているぜ！」

正憲はアイツの持っていたリュックと装備をオレの所へ運んできた。

「スタームルガーミニ30オートマチックライフル……」

さっき倒した老人だったアイツが持っていたのライフルは強力な7・62×39mm弾を装填出来るアメリカのus m1ガ
ーランドライフルの民間用モデルだった。

「弾薬はどうだ？」

「えーと、マガジンって言うんだっけ？これが6個と……10発入りの箱が2個だ」

ミニ30ライフルのマガジンはオレのブローニングライフルと同じ4発装填することが出来る。

ミニ30にあらかじめ入っていた分を合わせると50発弱、それと、倒れていた男性が持っていたクロスボウの矢は30本少し。武器には少しだけ余裕ができた。

「なあ、今思ったんだけどこの二人って家族なんじゃないか？」

正憲が二人の死体を見ながら呟いた。

「何で？」

「だって、おっさんの方は首噛まれているのにクロスボウの矢は撃っていないし、ナイフも鞘に入ってたまだ。だとしたら……」

その時嫌な考えがオレの頭をよぎった。

家族や友達、顔見知りの人間がアイツらに噛まれたらオレはそいつを倒せるだろうか……

このおっさんのように相手が家族が知り合いかは知らないがそうだったとしたら、オレは迷わず噛まれて感染した友達を殺すことが出来るだろうか……

今までのように全く知らないアイツらに襲われても自分達が生き残るために心のなかに躊躇はあったがそれを無視して倒してきた。

オレはこの異変が始まってからこうということが頭の中に浮き出てくるたびにそういった思考をかき消してきた。というより逃げていた。

だが、オレもそろそろこういった最悪の展開を考えねばならない。

今オレ達がいるこの村は普通というものが完全に消え失せた。

これから何が起こるかわからない。明日……いや、一時間後にさえ自分が生きているかもわからない状態なのだから……

「ユースケ！」

後ろから声がした。

「銃声が聞こえた。何かあったのか!？」

諏訪子がコノハに肩を借りて息を切らして走ってきた。

「いや、コイツが後ろから襲いかかって来たから…
…倒しただけだ。武器を持っていた」

オレは一旦、考えていた最悪のシナリオから頭を離した。

「それはそうと、一旦ここで休まないか？ここは平坦な場所だから諏訪子もゆっくり休むことが出来る。それに昨日から何も食ってないからここで朝飯にでもしようぜ」

オレはさつき老人だったアイツを射殺して食欲は全くなかったが体力だけはキープしておかないといけなかった。ここで朝食をとることにした。無論、2体のアイツらの御遺体はオレ達の目の届かないところに安置して。

コノハがバツクから缶詰めを取り出していたときだった。辺りを散策していた正憲がなにか見つけたようだ。

「おい、何だコレ！？」

正憲がオレ達から少し離れた所で斜面に向かって指を指している。

諏訪子以外全員がそこへ駆けつけた。

鉄板の上にツルや枯れ葉が付着している。

よく見てみると鉄板には取っ手のような物などが付けられているのが確認できた。

どうやら何かの扉のようだ。

扉らしき物のすぐ右にはかなり昔に書かれたと思われる文字が書いてあり【昭和十　　】と読むことができたが、あとは削れていたりかなり汚れていたもので読めなかった。

「トンネルか何かだ。とにかく、調べて見ようぜ」

オレはその扉を覆っている草や葉っぱを取っ払った。

「鍵が掛かっている。南京錠だ。しかも錆び付いている」

「これだけ錆びていたら鍵があっても開くかどうかわからないぜ。しかも鎖でグルグル巻きにしてあって……」

「破片が飛ぶ。退いてろ。」

オレは肩に掛けていた学生鞆から今朝までいた家で見つけたスラッグ弾（散弾銃で使用する一発弾。運動力伝達効果が大きく主に大型の獲物を狩猟するとき使用される）を取り出して上下の銃身に装填した。

全員が障害物の影に隠れたあとオレも扉から3メートル程離れた木を盾にして狙いを定めた。

再び一発の銃声が山の静まり返っていた空気を切り裂いた。

銃声が響くと同時に南京錠に弾が当たって、着弾した部分が切れた。

オレ達は切れた部分を扉から外して開けた。

「どうやら防空壕みたいだな、大東亜戦争時の」

山の斜面に掘られた穴はどうやら先の大戦の時掘られた防空壕だった。

「どうだ？中に入れそうか？ここに隠れていればアイツらをやり過ごせるかもしれない」

「結構中は広いぞ。懐中電灯の光が奥まで届かない」

「……どうする？入ってみるか？」

「もしかしたら、別の入り口があるかもしれない。」

オレ達は防空壕の中へ入る決心をした。このまま下山

してもアイツらがどこから飛び出して来るか分からなかったからだ。
しかし、この防空壕は今オレ達が開けたばかりなので
中にアイツらは居そうにない。まあ、この防空壕の別の入り口から
既に入り込んでいるヤツがいたとしたらそれは別にして……

——チャキンッ——
——シャコオンッ——

オレ達は銃に弾がリロードしたことをお互いに確認しあ
い、中に入る決心をした。

現在、午前6時57分

第十四話

side ユースケ

葛藤（後書き）

最近、少しずつ執筆、更新速度が上がってきているのでこれからもどんどん更新していきたいと思います！

感想など頂けたらとても嬉しいです！

ご意見などがありましたら遠慮せずにとしどし送って下さい！

作者の励みになります。

第十五話 side ユースケ トランス

ーダンダアンツーー

「ッ！リロード！」

「小林、ユースケをカバーしてくれ！」

防空壕から抜け出したオレ達はしばらく歩いたあとアイツらから襲撃を受けた。

ちなみにオレ達が抜けた防空壕は800メートル程の長さで出口は住宅が密集したところだった。

最初の内はアイツらも少なく手近な奴だけ倒して進んでいた。

しかし、住宅の中でオレ達を見つけたアイツら5、6体がいきなり窓を突き破って襲いかかってきた。

窓が割れる音が大きく響きわたったので、他の住宅からも次々とアイツらがわいてでてきた。

しかも、何が最悪かって複数アイツらが襲ってきたので銃をどうしても使わざるを得なかった。

銃を使えば銃声でアイツらは更に集まってくる。だから、一刻も早く目的地へ逃げ込む必要がある。

一旦は防空壕に戻ろうとしたのだが既に音を聞き付けたアイツらが集まりだしてきたことで完全に退路を断たれた。

「みんな、固まれ！バラバラになるな！」

オレや正憲が最前線にたち小林がバックアップを務める。

オレ達は迫りくるアイツらを倒しながら立て籠ることが出来る目的地へ向かっていた。

目的地というのはここから約3キロ先の山の中腹にある廃ホテルだ。見た感じボロボロだったがコンクリート製だったので補強して立て籠るには十分だからだ。

本来なら役場にいるヒロシ達と合流したかったが今、オレ達は村のどの辺にいるのかすらわかっていないのでとりあえず、村が一望出来る廃ホテルを拠点にする事にした。

アイツらから逃げ回っていて気付いたが思っていたよりこの昼ヶ岳は広い。

しかも、落ち着いて建物を物質する暇なんてないので、とにかく廃ホテルへ急いで立て籠らねばならない。

「左から来てるぞ！」

小林はレミントンm870をアイツらに向けて撃つ。

コノハもオレがさつき拾ったミニ30ライフルを持たせて応戦させる。

コノハも諏訪子をサポートしながらライフルを撃つが至近距離でしかアイツらを倒すことが出来ない。

それでも、アイツらを近づけさせまいと懸命に応戦する。

コノハは暗記等は人の苦手だが、ライフルの使い方は教えたばかりにも関わらずこの短時間に驚くほど撃ち方を上達させた。

これが今のオレ達の意味であり、答えだ。絶対に死んでたまるか！！

この村から生きて脱出して家族の元へ帰るんだ！！

オレ達は互いにサポートしながらとにかく、前へ進んだ。

オレ自身も体力はある方ではないが何百メートルの距離を重い装備を担ぎながら、皆と共に走り抜けた。

「廃ホテルへの距離が半分近くまで来た頃だろうか。
オレ達のすぐ前に車が電柱に左半分を突っ込んで停止していた。
車の運転手は見当たらない。
恐らく車を捨てて逃げたのだろう。
逃げる際に荷物を取り出したのかトランクは開いたままだ。」

（この車がもうちょっと斜めに止まってくれていたらアイツらへの障害物になったのにな……）

オレにふとそんな考えがよぎった。

オレ達の100メートル程後ろからはアイツらがまるでスタートしたての東京マラソンの参加者の如く道いっぱい走ってくる。
追い付かれたら確実に死ぬ……！！

「ホテルまであと少しだ！」

オレは武器をブローニングライフルに切り替えボルトを引いて初弾をした。

「クソッ！前にも居やがる！」

小林が前方のアイツらに攻撃する。

前にもアイツらが十数体こちらに向けて走ってきている。

「チクシヨウ！強行突破だ！！」

オレは銃を構えながら全員に告いだ。

諏訪子にも上下二連式散弾銃を持たせてアイツらの中を突破させる準備をさせる。

「準備はいいか！？」

オレもライフルのマガジンをいくつもポケットに入れて全員の確認をする……

「正憲は!?!」

諏訪子が叫んだ。

オレ達も回りを確認するが正憲がいない。

まさか、アイツらに喰われたー!?

ー!ーキュルルルルル……ドルルウンー!ー

「早く乗れ!?!」

電柱にフロントを突っ込んだ車の運転席から声が聞こえた。

正憲が車のハンドルを握りながら。

「前にいるアイツらは多すぎる。コイツ(車)で敵中突破するぞ

!?!」

正憲は中二病満々のセリフでエンジンを吹かした。

「……!?!? 正憲、お前車の運転なんか出来るのか!?!?」

車に乗り込んだオレは心配になって尋ねた。

この時、気づくべきだった。

ー!ーこんなこと聞かなきゃ良かったって

「き……近所の兄ちゃんに自動車学校の教科書みせてもらったことがある!?!」

正憲はチェンジレバーを操作しながらあまりにも頼りなさ過ぎる返事をする。

……大丈夫か、こいつ……

「えーと、このP……P……ぶ、プレイ?よっしゃ、これで走れる!?!」

……違う!?!それはパーキングのPだ!?!

「お前バカか！！パーキングは停止だ！！走るならドライブ、Dだ！」

オレが怒鳴ると正憲はあわててレバーを切り替える。

「ヤバイヤバイ！！後ろにバックしてる！！」

正憲がハンドルを右や左に回しながらブレーキを踏んだ。

そりゃ坂道だからね、ココ。

「お前……！せめて自分ちの庭とかで運転の経験はあるのか！？」

オレはシートベルトを掴みながら尋ねた。

「……ゲーセンの湾岸で地元最速ラップをたたき出したことはある……！」

オレ達に死刑宣告が通達された。

……つまり実質運転経験は無し。

「ちょ、お前待て！！絶対車を使わないほうが安全……！」

諏訪子が言い終わる前に正憲はアクセルを踏んだ。

そりゃあもう清々しいぐらいに。

……バキバキツ……ガシャンツ……

さつき、突っ込んだ電柱にもう一度、左のフロントをぶつけて車が発車した。

正憲の運転する車は前にいたアイツらを轢きながら坂道を恐ろしいぐらいのスピードで走り抜けた。

「正憲！スピード落とせ！！急カーブ！！前！まえ……！」

正憲はブレーキを踏むことなくハンドルを切った。

「ガリガリガリガリッ……バキッー」

車の側面をガードレールに擦りながら急カーブを曲がる。
今、右のサイドミラーが車本体と離婚した。

「おお！なんかコツが掴めたぞ！」

「……黙れ……！」

その場にいた正憲以外の全員が怒鳴る。

「うおおおおー！」

正憲は80キロぐらい出しながらアイツらが気の毒なほど撥ね飛ばしながら目的地へと車を走らせる。

「吐きそう！吐きそう！」

小林がシートベルトを握りながらまるで自分へ念仏を唱えるかのごとくシートにしがみつく。

しかし、そんなことはお構いなしに奴（正憲）は歌いながらアクセル踏みっぱなしで車を運転する。

ちなみに、エンジンがかかったと同時にスピーカーに繋いであった携帯音楽プレイヤーから（正憲の）戦意を向上させる音楽が流れてきた。

……RED ZONE……

「ダン（ ）ダン（ ）ダン（ ）ダン（ ）ダンダンダン（ ）
ダダダダン（ ）ダダダン（ ）」

だめだ、正憲が壊れた。

オレ達は最早アイツらより今のこいつの方が怖い。

殺人的怖さだ。

「あ……アハハハ！やべえ、アイツらを完全に振り切ったぞ！ど
うだ！俺の運転テクに……あだあ！！！」

とりあえず、本気で殴っておいた。

今は言葉より拳のほうがコイツに話が通じる。

「とにかく、目的地へ急ぐぞ」

オレは荷物を背負うとライフルを肩にかけて諏訪子に持たせた散
弾銃を装備した。

小林はまだ殴り足りないようだったが今はどこからアイツらが出
てくるか分からない。

昼ヶ岳を無事に、生きて脱出したら存分に正憲を殴ろう。

小林はオレがそう諭すとニヤリとして装備を整えた。

ところで車はというとガードレールを突き破って山の斜面に車ごと
とまっ逆さまという最悪の事態は避けたが、車のフロントは住宅の
塀にめり込んで廃車確定だ。

オマケに正憲の殺人的ドリフトによってあちこちをぶつけたこと
で車のボディパーツは強制的に軽量化され車体全体はもれなくへこ
みまくっている。

これを45分で直せる人がいたらその人は神様だろう。

それにしてもこの車の持ち主には本当に同情する。

乗ったときに分かったがどうやら納車して間もないし、オプション
パーツもつけまくっている。

値段も1000万近いだろう。

車本体はレクサスのいいやつだし。

とりあえず、この車の持ち主に会わないことを願うしかない！
いや、別にアイツらに食われて欲しいとかそんな訳では全くない

が。

「よし、それじゃ行くぞ！」

オレ達はアイツらが追って来ないうちに残りのホテルまでの坂道を駆け出した。

「……クリア！」

オレは先の分かれ道を銃を構えて安全を確認した。

この先にも住宅が何件かあるからさっきのようにアイツらが飛び出して来ること考えられる。

「慎重に行くぞ……」

オレが銃を構えて住宅の門の前を通った時だった。

「……ダッ……」

不意に何かが目の前に現れた。

オレは反射的に銃を構えた。

「……ッ、お前……」

飛び出して襲いかかって来たのは見覚えのあるやつだった。

オレは銃をおろした。

アイツらじゃない。

制服に血が着いているがしっかりと立っていてオレを見ている。

牧田だった。

研修旅行の間、一緒にゲームをしていた牧田だ。

「お前、大丈夫だったか！？ 噛まれてないか？ 他のやつらは？」
オレは牧田に思い付いた質問を片っ端から尋ねた。

他の皆もアイツらではなく生きたやつ、それも自分たちの仲間
再開して安堵していた。

「お前、その血はアイツらのか？……噛まれているようには見
えないけど、誰か他に居ないのか？」

オレは牧田の肩を叩きながら話を続ける。

「役場にもヒロシやサトシがいる。オレ達の脱出経路を探して
くれているんだ。お前も一緒に帰ろう。誰かいるならそいつも連れて
……」

「」

「え？」

「襲つて来たんだよ、襲つてきたんだ。おれに襲つて……」

牧田はぶつぶつと話始めた。

牧田もアイツらに襲われたようだ。

服も汚れていることから見てここまで死ぬ気で逃げてきたようだ。

「ああ、分かった。オレらもアイツらに襲われてここまで逃げて
来たんだ。とにかく、隠れる場所があるからそこへ行こう。話は後
でゆっくり聞くから」

オレは牧田を連れて目的地である廃ホテルへ向かおうとした。

「あああああああ！……！」

牧田はいきなり叫んでポケットから果物ナイフを取り出すとオレ
に切りかかってきた。

「……！」

オレはすかさず散弾銃で牧田の果物ナイフを受け止めた。

「牧田！？やめろ！！オレは噛まれていない！アイツらじゃない！！」

しかし、牧田は攻撃を止めない。

牧田の果物ナイフを受け止めた散弾銃の銃身がナイフと擦れあつてギリギリと音を立てる。

「やめろ！牧田ア！！」

小林がレミントンを牧田に向ける。

「やめろ、小林！コイツは噛まれてないんだ！」

ナイフを容赦なく突きつけてくる牧田にオレはやむを得ず、散弾銃で押し出して顔面に頭突きを食らわせた。

牧田は揺らめきながら顔を押しさえて立ち上がる。

牧田の顔からは鼻血が溢れた。

「落ち着け！！」

オレはバランスを立て直すと牧田に冷静になるように声をかけ続けたが何かを叫んでいて全く通じない。

牧田はオレにタツクルかましてきた。

オレはその攻撃で斜面のガードレールにぶつかり散弾銃を斜面の下に落としてしまった。

「……くっ！」

オレは自分をガードしていた散弾銃が無くなり素手で牧田の果物ナイフを握る手を抑えた。

ナイフがオレの顔の5センチまで迫ってきた。

「クソがあ！！」

オレは体をひねって牧田の腹に膝蹴りを入れた。

「アガッ！！」

牧田は腹部を押さえてその場につずくまった。

「チクシヨオ！行くぞお前ら！！」

オレは失った散弾銃の代わりにライフルに持ち替えて牧田を除く
全員を連れて廃ホテルへと向かった。

後ろでは牧田がうずくまったままだった……

現在10月1日7時47分

第十五話 side ユースケ トランス（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております！
作者の励みになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6365t/>

panic of infect 【昼ヶ岳村編】

2011年11月20日05時04分発行